

ちょっと平和なF a t e / s t a
y n i g h t

ライム酒

ちよつと変わった聖杯戦争です。

各キャラの性格をちよつと変えて未来を変えたり、過去をちよつと変えて性格を変えています。

タグは最新話の登場人物です。

タイガや他のサブキャラは本編にあまりかわらないので抜いています。

目次

そこそこ舞台説明のようなプロローグ	1
そこそこ進んで去年の冬	11
ちよつとした日常	21
ちよつと賑やかで懐かしいもの	35
ちよつと爺さんに会えた夜ご飯	47
ちよつと刺激の強い夜	59
ちよつと昔話をひとつ	71
ちよつと垣間見える神秘	83
ちよつと衛宮さんちの今日のごはん	97
ちよつと明かされる桜の黒さ	111
ちよつと忙しない聖なる前日	125

ちよつと人の集まる聖なる前夜
とても幸せな回想

そこそこ舞台説明のようなプロローグ

6／18 タイトルをちょっと変更

「あの……先輩。先輩がその、このお父様の養子だったって話、本当なんですか？」
それは爺さんが死んでちょうど4年目のことで、今から1年ほど前にあたる日のことだ。

俺はバイト先でふと怪我をしてしまい、その怪我を部活中に友人から指摘されて、そのまま部活を辞めてしまった。

別に部活が嫌だったとかでもなく、怪我が理由だったわけでも本当はなかったのだが、辞める理由ができたから辞めたのだった。

しかしその後になぜか俺の家にその友人の妹がやって来て、その子になし崩しの形で俺の世話をするようになった。

それから幾月かたった日の、静かに亡くなった爺さんの数えで5回目の祥月命日の日だった。

「お父様って。まあそうだな、俺は爺さんに拾われたんだ」

すっかり怪我也治ったというのにいまだこの家によく来て、俺の手伝いをしてくれる後輩の桜があんまりに上品に爺さんのことを呼ぶので少し笑ってそう答えた。

「その……先輩は養子だったことに、なにか思わなかったんですか？」

朝早くから訪ねてきて、一緒に墓参りも済んでから今は家にある仏壇の前で正座をして、そんなことを遠慮がちに聞いてきた。

——養子だったことに思うところはなかったか、か。

「特にはないかな」

「どっ、どうしてですかっ!？」

桜は俺の言葉にやたら動揺して聞き返してくる。

——どうしてかって言われてもなあ。

思ってもみなかったことなので少し考えてから俺は答える。

「いろいろあるけど一番は、『姉さん』が俺のことを好きだって言ってくれたからかな」

「っ……!」

俺の答えに先ほどの動揺とは少し違うような様子を見せて桜は黙りこんでしまった。

「それで桜はどうしてそんなことを聞いてきたんだ？」

「あつ、いえその。私も養子だったんです。だからなのか家ではなんか……よそよそしいというか、少し煙たがられている気がするんですよ」

目線を変え、遠くを見ているかのようにおそらく桜の家の方向を見ているのだから、小さな声でそう呟いた。

「あつ、それよりも！先輩のお姉さんってどんな方なんですかつ!?」

正座を崩して俺の方に身を乗り出しながら、先の発言を思い出したかのように少

し慌てて聞いてきた。

それを俺は身を引きながら、どこか恥ずかしいことのように目線を泳がして答える。

「いや、えーと。小さくて可愛い子だよ。年齢的には姉なんだけど背も小さくて、言動とか雰囲気もその見た目通りな感じで妹みたいな子かな」

「それじゃあ、その『す…好き』って、どういうことですかっ?」

「どういうって、そりゃあ家族としてじゃないか? 姉弟なんだし」

「でも先輩より年上ってことはその方はもしかしたら18歳以上ってことで…それには養子ってことは義姉弟ってことで…ご両親とも亡くなられてるってことは未成年でも合意なしで……」

あわあわしながらどんどん小さくなる声で何かをつぶやいて慌てている桜を見て、少し笑いながら俺はかわいい姉の説明をする。

「ほんと小さい子なんだって。見た目も10歳ぐらいだし、言動もわーって感じで幼い子のまんまなんだ」

「そ、そうですか。それでその方は今どちらにいますか? 今日ってその方の

お父様の命日何ですよね？」

ようやく落ち着いたのか、桜は姿勢を正座に戻してなおも聞いてくる。

あげた線香も半分の長さになってきて、流石に足もしびれてきたので俺は立ち上がって答える。

「姉さんの名前は『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』って言うんだ。長いから愛称としてイリヤって呼んでって言われてるけどな」

その名前を聞いて桜は少し目を見開いた。

「ああ。その子は日本人じゃなくてドイツ人なんだ。いや、詳しくは知らないけど確かドイツに住んでるらしいからそうなんだと思う。それでここから距離的に遠いってこともあるし、宗教的にも今日がむこうにとって特別な日ってわけじゃないからさ。一回忌の時はこっちに来たけどその後は冬に遊びに来る程度だよ」

「……。そうだったんですか。冬だけ……」

そう言って桜は下を向き、小さくてこちらに聞こえない声でぶつぶつと何かを言っていた。

それを後目に俺は台所でお茶を沸かす。

「それで桜が養子だったのはどうなんだ？煙たがられてるってまさか慎二にか？」
確か桜の家、もとい慎二の家には両親もおらず桜と慎二、それと使用人が数名で暮らしていたはずだ。

だから家で煙たがられているってことは慎二が桜をとということになる。

「えーと。……はい、そうなんです。あと知っていると思うですけど、その家政婦さんからもどこかよそよそしいというか……」

顔を上げて俺がお茶を沸かしているのを確認したのか、桜は腰を上げて柵から湯のみを出しながらそう答えた。

「うーん、そうなのか。気にしすぎたと思うけどなあ。何か昔にでもあったのか？」

俺のその質問を聞いた桜は体を一瞬ピシリと止め、そして体を強張らせながら湯呑みをお盆に乗せてこちらに歩いてきた。

「はい、何かあったと言ったらあったのですけど。それが関係しているのかは私に

はわからないんです」

「どういうことだ？」

「兄さんも私と最初にあつた時は優しかったんです。あくまで兄さん基準なんですけど」

そう少し微笑みながら俺の元まで来て、湯のみを渡してくる。

そして俺も沸いたお茶をそれに注ぎ、それぞれ手に持ってテーブルにつく。

桜はお茶に少し息を吹きかけ、少し冷ましてから一口のんでから言葉を続けた。

「それで態度が変わった気がしたのは、お爺様が亡くなった時からなんです」

お爺様。

それは初めて聞く慎二と桜の続柄だ。

とりあえずお茶を一口のみ、話を続ける。

「亡くなったのはどれくらい前の話なんだ？」

「8年ほど前の話です。ですが亡くなったというか、消息不明というか、不思議なんですけどある日ぱったりと消えてしまったんです」

桜は両手で湯のみを包み、手を温めながら答える。

「だんだんとは元気がなくなってるようなあとは感じてたんですけど、次の日にはいなくなってしまったんです」

「いなくなっただけのが気になるが、なにか病気だったのか？」

「いえ、特にそういう話は聞いてないんですけど、ある日から廊下で倒れていたり、でろおって溶けてきたりで大丈夫かなあと思っていたらって感じなんです。もしかしたら病気だったのかもしれないですね」

——……。廊下で倒れてるのは心配だけど、でろおってなんだ、でろおって。

「なにか変わったことでもあったのか？廊下で倒れてるなんて相当だろ」

「そうですね……。そういえば冬なのにやたら虫が多かったので家中に蚊取り線香をたいたり、庭の隅々まで殺虫剤をまいたりとか、最終的にはバルサン[®]を登校前に設置しました」

やたらと執拗的に虫を殺そうとしてるが嫌いなんだろうか。

まあ女の子で虫が好きな方が珍しいとは思うけど。

「うーん、もしかしたその殺虫剤の成分が年取った体に耐えられなかったのかもしれないな」

あまり深刻なようには言わないように気をつけながら頷く。

「……そうかもしれませんね。そういうえば家の壁によく『蚊取り線香禁止！』って掲示がされてました。お爺様も私自身に殺虫スプレーを使ってからは近寄らなくなった気がします」

「そ、そうか。かなり本格的に虫駆除に乗り出してたんだな……」

「はいっ！それはもうすごかったんですからね！秋はリンリンって癒やされてましたけど、冬はジージーって夜も眠れないほどに喚いていたんです！」

少し興奮したのか桜はフーッと息を吐き、おそらくぬるくなった残り少ないお茶を一飲みした。

お茶をつごうか？と尋ねると自分でやりますと桜は答え、俺の空いたお茶も持って行き、台所へと向かっていった。

「——たっだいまー!!」

玄関のドアをパンツと開け、おそらく喪服から軽い服に着替えてきてから、いつものうるさい虎が帰ってきた。

そんなある日のいつものことだった。

そこそこ進んで去年の冬

6／18 ちょっとタイトル変更

「はじめまして、わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。シロウが世話になってるようね」

その始まりは桜が家に来るようになってから半年ほどたった日のこと。

日が短くなり冬が近づいていることにだんだんと身にしみてきた夕暮れの時だった。

一本の電話がなり、もしもしと手にとって耳に近づけて俺はすぐに後悔した。

「お兄ちゃん！ひさしぶりー！来月遊びに行くねっ!!」

おそらく向こうでは朝一番なのだろうに元気な声が耳にきんきんと響く。

「わかった。また近くなったら詳しい日取りを教えてください」

それは毎年恒例のしろいこあくまの襲撃のお知らせだった。

イリヤと交流が始まったのは俺が爺さんに拾われてから少したったことだ。

拾われた日、それは何もかもが燃えてすべてを失った日のことで、そして俺が衛宮士郎になった日だ。

爺さんが死んでからはいろんな意味でその日のことに決別しているが、それでもその日を忘れたことはない。

それから3年近く色んな所が封鎖されて、災害とは全く関係のなかった柳洞寺周辺の山も立ち入りを禁止されていた。

うわさでは原因不明な災害であったので、海外からも研究機関が来て調査にあたっていたともっばらされているが、実際のところなんの発表もなく封鎖は解かれたので真相は闇の中となっている。

まあ真相が闇の中ってのは災害の影響なのか、その期間の記憶が結構曖昧であ

り、自分でも進んで調べようとは思ってなかったりするからなのだが。

それでも今では爺さんと一緒に過ごせだし、冬だけ会えるかわいい姉もいることで前を向いていこうと思うようになった。

そんなことを思い起こしながら俺はいつもの土蔵へと向かって行った。

それから数日がたってイリヤが訪れる日もいよいよ明日となり、お好み焼きが食べたいという注文も頂いたので桜と商店街に来ている。

放課後でもあり、一度帰宅してからなので日は大分傾いてきていた。

「いよいよ明日なんですネ」

とりあえず必要なものを買って終わり、重くなった買い物袋を持って少し緊張した様子の桜がそう呟く。

「悪いなこんな時期に。受験もあるってのに大変だろう」

「いえ、お気遣いありがとうございます。でも受験勉強は結構順調なんですよ」

桜は現在中学三年生であり、年が明けたら受験が間近に迫ってくる。

本当は今日一人で準備する予定だったのだが、私も手伝わしてくださいと強く言われて俺は何度も説得したが桜は最後まで折れなかった。

意外なところで頑固なのは昔から変わらないのだが、どうやら今回はかなりの本気らしく、家でもお好み焼きを練習しては慎二に食べさせていたらしい。

桜が言うには最初が肝心なんですと両手を握り、強く力説されて俺が折れてしまったというわけだ。

「先輩のお姉さんはドイツ人の方なんですよね。それなのになんでお好み焼きを頼んだんでしょうか」

今さらなんですけど前置きされて質問をされる。

「うーん、イリヤにお好み焼きを何度か作ったことはあるけど特別お気に入りって訳でもなかったしな。たぶんそういう気分だったんだと思うぞ」

「そうなんですか……。それじゃあ何が一番好きなんですか？」

「一番好きなのって言われたら多分たい焼きになると思うけど、料理で一番好きな

のはハンバーグだろうな」

ハンバーグ……、ハンバーグかと桜は小さな声で繰り返し、どうも脳内でハンバーグの料理の練習をしているようだった。

——あれ？

無意識に手を動かしている桜を見て、少しほえましくなって笑っていた俺の視界の端に銀色の何かが映り混んだ。

映った方を向き、目を凝らすとここから少し遠くにあるたい焼き屋の前で小さな銀色の少女が跳ねていた。

「なんでさ」

思わず呟いてしまった言葉に反応した桜が俺の方を向き、そして俺が向いている方向に向き直してしばらくすると小さくアッと声をあげて、目を見開いてこちらを改めて見つめてきた。

「あの、先輩もしかして……。あの子……」

「そうだよ。あそこでぴょんぴょん跳ねてるのが俺の姉さんだ」

そう言うとき桜はまた顔の向きを変えてイリヤを観察する。

周りの人はキョロキョロと顔の向きを変える桜を訝しんで少し注目が集まっていた。

「さ、桜。なんでもういるのかは知らないがとりあえず挨拶しにいくか」

「はっ、はい！そうですよ。がんばります！」

果たして何を頑張るのかはこちらも知らないが、未だぴょんぴょんと跳ねているかわいい姉のもとへ俺たちは歩いて行った。

「あっ、お兄ちゃん！久しぶりー」

ある程度近づくときイリヤはこちらに気がつき、満面の笑みをうかべて走ってくる。

「イリヤ。いきなり走り出したら危ないだろ」

えっ、お兄ちゃんと少し面食らったように呟く桜を横に、俺はイリヤに苦言を呈する。

そして走ってきたイリヤも俺のとなりに桜がいることに気がつくとき一度立ち止まり、こほんと咳き込んでから一転して優雅にこちらに歩いてきた。

「はじめまして、わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。シロウが世話になってるようね」

向かい合える距離までお互い近づくとイリヤはスカートの裾をつまみ、まるでお嬢様のように桜に挨拶した。

「い、いえこちらこそ先輩に色々教えてもらっています。間桐桜といいます」

桜も桜で買い物袋を持ったまま両手を合わせて深々とお辞儀をして挨拶を返す。そして顔をあげた桜とイリヤが目線を合わせた瞬間、何か時間が止まった気がした。

「えーと、イリヤ。もう電話でも言ったから紹介はいらないと思うけど改めて、こちら間桐桜。俺の友人の妹で、よく家に来て家事の手伝いをしてもらってる」

俺がそう紹介すると改めてにつこりと両者が会釈する。

「そ、それで、桜。こちらがイリヤ。俺の義理の姉にあたって、8年ぐらい前から冬になるとこっちに遊びに来る子だ」

俺がそう紹介すると改めてにっこりと両者が会釈する。

——…っらい。

「……もーシロウ。義理とか遊びに来る子だ、なんて他人行儀な説明しないでよね。シロウとわたしは本当の家族なんだから！」

ぷくうとほほを膨らませ文句を垂れるイリヤ。

「ええ、本当の兄妹みたいで羨ましいです」

うふふと微笑みながらなぜか横にいる俺に一步近づいて話す桜。

「……」

「……」

両者がお互いをじっと見て、また空気が凍る感じがする。

気がつくと回りの人もどこか俺たちを遠ざけて歩いている気がする。

「はあ、あなたがマキリの子ね。その様子だとほとんど知らされていないみたいだけれど、本当になくなってしまったのかしら」

さすがに身長差からイリヤは桜を見るときには見上げないといけないからか、先に目を離してから遠くを見て小さな声で何かを呟いた。

「それよりどうしたんだ？来るのは明日だったんだろ？」

ようやく空気が落ち着いたので、再びあの緊張した空間に戻らないようにかねてからの疑問をぶつける。

「ええ、シロウに会いに行くのは明日の予定だったの。今日は少し用事があって、さっき済ましてきたところよ」

用事のことを話しているときにイリヤはまた違う方向を見上げる。

——あの方向には……柳洞寺か？爺さんの墓参りにでも先にいったきたのかな。

「そういえばイリヤスフィールさんはたい焼き屋の前でどうしてたんですか？」

「ああ、サクラもわたしをイリヤって呼んでいいわよ。それとあれ？あれはたい焼きをちようだいって頼んだのに日本円じゃないとダメって言われたから怒ってたの」

怒りがまた沸き上がってきたのかイリヤは腕を組んで眉をしかめ始める。

はいわかりました、イリヤさんと桜は答えてから——

「じゃあ私が買ってきますね。先輩もいかがですか？」

「ああ、よろしく」

すると自然に桜は提案してきて、流れで俺もそのまま答えてしまった。

そしてそれを聞いて桜はたい焼き屋に小走りで向かっていく。

「いやまって。俺が払うよ」

さすがに中学生の後輩にたかるのは高校生として沽券にか変わるため全力で阻止にかかった。

その様子を眺めていたイリヤは少し目を見開いてから、楽しそうに俺たちの後をついてきているような気がした。

ちよつとした日常

ほかほかのたい焼きを買い食いしながら俺とイリヤと桜の三人で帰路についた。桜は俺たちを少し気遣ってか二歩ほど後ろを歩き、イリヤは俺に桜とはいつ、どこで、どのように出会って過ごしてきたのだと話しかけてくる。

俺はそれについていろいろと思い出話を語っては後ろにいる桜が笑ったり、顔を赤くしたり、拗ねたりして話しに加わっていた。

そしてたい焼きも桜が食べ終わり、俺が食べ終わって最後にイリヤが食べ終わる頃には、ようやく一人で暮らすにはあまりにも大きな武家屋敷の門扉まで来た。

俺はドアの鍵を開けて一足先に玄関を通ってから。

「じゃあ改めて。おかえり、イリヤ」

毎冬恒例の挨拶をイリヤにすると、イリヤは笑顔で。

「ただいま、シロウ」

と返してくれる。

すると目の前の光景に少し萎縮したのか桜は玄関の前に立ち止まってしまふ。

その様子にいち早く気づいたイリヤは桜に声をかける。

「ふふ、サクラもいらっしやい。シロウと一緒にわたしを歓迎してくれるんでしょ

？」

「は、はいっ！おじゃまします」

そんないつもと少し違う帰宅の賑やかさだった。

リビングというより居間と呼んだ方が正しい部屋に向かい、イリヤはいつも俺が座っている隣の席に座り、俺と桜はお茶の準備をする。

「今日はどうするんだ？」

「この後少し落ち着いてから帰ろうと思います。大分外も暗くなっていますし、兄さんも家で夕御飯を待っていると思うので」

予想外の出来事によって帰宅が遅れ、東の空はもう夜の色になっていたから桜に尋ねるとすぐに答えが返ってきた。

「そうか、送ってくよ」

「えっ、でも——」

一瞬、「なんでまだコタツがでてないのよ」と愚痴っていたイリヤを見て。

「——悪いですよ」

と桜は遠慮するが。

「こんな遅い時間まで付き合ってもらったんだ、送るぐらいしないと慎二に合わせる顔がない」

それでもこちらも引くわけにはいけないので、悪いと思いながら慎二の名前を出す。

その言葉に諦めたのか桜もわかりましたとうなずいてくれた。

「悪いなイリヤ。コタツは冬休みに入ってから出そうと思っていたんだ」

お茶と茶請けとして用意した大福をテーブルに並べ、イリヤのとなりに座る。

「むう、あれを楽しみにしてたのにー。でもそうね、こっちはまだそれほど寒くはないし、もう少し冷え込んできたときに出した方が気持ちいいものね」

自分で納得したのかうんうんと頷き、それから手を伸ばして大福を食べ始める。桜もそのようすを見てから俺の対面の席に着き、失礼しますと小さくことわりいれて大福を食べ始める。

俺も残りひとつになった大福をとって、一口口にする。

——お、うまい。

イリヤが来るということでもいつも少し高めの茶請けを用意したが、値段は裏切らないのか大福は食べたときに気持ちいいもっちり具合としつこさのないアンのコは自然な甘さだった。

すると二人して俺を見て笑っていたので、どうやら先の感想は自然と口から漏れていたらしい。

少し顔が赤くなるの感じ、ごまかすように急いでお茶を飲む。

「あちっ！」

「せつ、先輩大丈夫ですか!？」

「もう、シロウ。お姉ちゃんが来たからって慌てすぎよ」

思いのほかお茶はまだ熱く、慌てて湯飲みをこぼさないようにテーブルにおいた。

桜が心配して席を立っていたが大丈夫だと手をかざして席に戻した。

イリヤも言葉とは裏腹に少し心配した目でこちらを見ていた。

「あ、ああ。すまんすまん」

と謝ってから改めてゆっくりお茶を飲んだ。

ゆったりとした緩和された空気が流れると。

「そういえばイリヤさんは今日ここに泊まれるんですか？」

桜がふとした疑問を口にする。

「いつもそうしてるけど？」

それがどうしたのと言う顔でイリヤが答える。

「いえ、その服とかどうするのかなと思って」

「ああ。それなら切嗣が買ってくれた服がこっちに置いてあるわ」

「え？でもイリヤさんのお父様4年前に……」

「ええそうだけだね。あれから身長はそんなに伸びてないのよ」

「いや、イリヤは最初に会ったときから変わってないだろ」

「むう」

とそんなとりとめのない会話が続いた。

お茶ものみ終わり、一息ついたところで桜は立ち上がる。

「イリヤさん、それじゃあ今日は失礼しますね」

「あれ？サクラ、今日は泊まっていけないの？」

「ごめんなさい。家に兄さんが待っていると思うので」

「うーん、そうなんだ。それじゃあ仕方ないわ。夜は一緒に寝ようと思っていたのだけれど」

「えっ、そ、それなら、えーと、明日学校がお休みなので兄さんと相談してみますね！」

少し慌てていたがすぐにパーっと花が開いたかのように嬉しそうな表情で桜が答えた。

「せ、先輩も私がお邪魔してもいいでしょうか？」

「ああ、俺は構わないよ。それなら慎二も呼んでやった方がいいかな？」

俺がそう提案すると一転、桜は困った顔に変わる。

「もうシロウ！ 兄がいたらサクラが気をつかっているいろいろ話せないかもしれないでしょ」

するとイリヤにたしなめられてしまった。

——なんでさ。

「そ、それじゃあ先輩。送りをお願いします」

「ああ、じゃあイリヤ。ちょっと桜を送ってくるよ。留守番よろしくな」

「いってらっしゃーい」

そうして手をふるイリヤを横に、俺もジャケットを着て桜を家に送っていった。途中、桜からイリヤさんはどこで寝るんですかとか、何時に起床しますかとかをかなり真剣に聞かれた。

——話しは変わるが桜の家はここらで1、2を争う大豪邸なのだが、相変わらず明かりがほとんどついておらずどこか寂しかった。

すっかり暗くなったなかで家に戻り、ただいまーと玄関のドアを引いて入っていきが、なぜか返事はかえってこなかった。

「イリヤー、いるかー？」

と少し大きな声で廊下を歩きながら居間に戻るとイリヤーは少し息苦しそうに眠っていた。

「おい、こんなところで寝たら風邪引くぞ……」

と起こさないように小さな声で愚痴りながらとりあえずタオルをかけて部屋を出る。

そうしていつもイリヤーが使っている部屋に行き、布団を用意してからイリヤーを抱えて布団まで運び寝かしつけた。

その抱き抱えてた最中に、寝付きが悪いのか吐息混じりに悶えていたのがかなり理性との葛藤のなかで気を揉んだ。

おそらく時差や環境の変化で疲れたんだろうと思いを飛ばして風呂を沸かしていた。

風呂が沸いてからしばらくたつとイリヤが起きて居間に戻ってくる。

「おはよう、シロウ。布団に運んでくれてありがとね」

目を擦りながら感謝の言葉を述べて、いつもの指定席に座りこむ。

「長旅で疲れたんだろ。今日はもう風呂に入ってゆっくり休め」

「うー……はい、そうする。ディナーを作ってくれてるのにごめんね、シロウ」
少しごねりそうになったが、自分でも疲れがあることを理解しているのかそのま
ま俺の言葉にしたがった。

イリヤはちょっとだけ机にもたれ掛かってから、しばらくすると姿勢をただして
立ち上がり、また部屋に戻っていった。

「これは風呂に入った後はそのまま寝るかな」

その様子を見守りながら俺は夕食の量を減らして料理を続けた。

その後イリヤは湯上がりの少し火照った赤みのある肌に猫耳パーカーのついたパ
ジャマで居間に来て、もう寝るねと伝えてから寝室に向かって行った。

今日の夕食は藤ねえも来なかったからか、いつもより少し味気なかった気がした。

「——と——ここにいた！お兄ちゃん！おはよー」

急な大声に俺は目を覚ます。

「先輩、おはようございます。またここで寝ていたんですか？いい加減風邪を引いちゃいますよ」

と昨晚が嘘のように元氣一杯な姉と心配顔の後輩が俺を見ていた。

「あー、悪い。今何時だ？」

「もう10時半です。藤村先生も朝御飯を食べに来ていますよ」

「タイガはほんと相変わらずね。シロウはまだかーってリビングでじたばたしてた」
立ち上がり手を上に伸ばすと固い床で寝た影響で凝った体から悲鳴をあげながらも気持ちいい感覚がやってくる。

ぐぬっと息をつき、ようやく覚醒する。

「おはよう。イリヤ、桜」

シャワーを浴びるため一度二人と別れた。

しかし10時半とはかなり寝過ごしたことになる。

桜が来たときにはイリヤと藤ねえがもう居間におり、お腹すいたと談笑していたらしい。

そのため桜は俺がシャワーを浴びている間に朝食を作るようになった。

——イリヤも元気になってよかったな。

先の光景を思い出して、俺は気持ちのいい朝を迎えた。

「士郎寝坊だぞー」

「ああ、藤ねえおはよう」

料理のいい香りがしている居間では藤ねえとイリヤが隣り合って座っており、桜が台所で鮭を焼いていた。

「なにか手伝うことはあるか？」

「いえ、もうすぐ完成するので大丈夫ですよ」

「そうか。……じゃあ沢庵でも切ってるよ」

どうやら今日の朝食は味噌汁、焼き鮭、卵焼きという純和風になるらしい。

迷惑をかけたのでそのまま戻るのもしのびなく、冷蔵庫から沢庵を取り出して一口大に切ることにした。

沢庵を切った後はお茶を沸かして配膳をし、桜の邪魔にならないように席に着く。

「藤村先生、そろそろご飯を注いでいただいてもいいですか？」

「りょーかい！桜ちゃん」

その合図とともに鮭も焼き上がり、俺とイリヤが机の上に続々と配膳していく。

そしてそれぞれ席に着き、最後に桜が自分の焼き鮭を運んで来る。

しかしいつも桜が座っている俺の対面の席にはイリヤがいることに気がつくときさくアツと声をあげ、空いている俺のとなりの席に視線が向く。

「し、失礼します」

と恐縮しながら桜が俺のとなりの席につき、その様子をイリヤと藤ねえがにやにやとしながら見つめていた。

——いったい何を企んでいるんだか……

そしてみんな席についたことで、毎食恒例の挨拶をする。

「それじゃあ、『いただきます』」

そんなやはりいつも通りの朝の光景だった。

ちよつと賑やかで懐かしいもの

朝食を食べた藤ねえは「ごちそうさまでした！桜ちゃんとっても美味しかったよ！！お好み焼も楽しみにしてるねー」と言っただけで学校に向かった。どうやら師走の時期は本当に師を走らせるらしい。

昼食も若干かねていたもので量もそれなりだったからか、かなりの満腹感で俺と他二人はその場からあまり動こうとしない。

「そういえば、イリヤ。今回はどれくらい泊まる予定なんだ？」

対面にいるイリヤに今後の予定を組み立てるため、宿泊期間を尋ねる。

「いつも通りの予定だよ。3月ぐらいに帰るつもり」

その言葉に疑問をもったのか、サクラは不思議そうに尋ねる。

「3月まで泊まって大丈夫なんですか？イリヤさんって向こうで何をしているんですか？」

「うーん、……ひみつー。どうしても知りたいならこっちまで遊びに来るといいわ。」

アインツベルンとして歓迎してあげる」

たははと俺は乾いた笑いで視線をずらし、その場をやり過ぐす。

そうか3月までか。

そうなるかと少なくとも後二ヶ月はこっちにすることになる。

後二週間そこらで年が明けるから今年も初詣に行くとして、その後は……あつ。

「そういえば泊まる許可は取れたのか？」

すっかり忘れていたが今日は桜が家に泊まる予定だったな。

「はい、兄さんからは勝手にすればって言われちゃいました」

「やったー！じゃあ今日はサクラと寝れるのね！」

「ええ、たくさんお話し聞かせてくださいね」

さつき桜を軽くあしらっていたイリヤが今度は見た目相応の反応を返してくる。
桜も何を話すつもりなのかイリヤと寝るのが楽しみなようだ。

——わからなくもないがもう少し言い方があっただろうに。

そんなことを思いながら二人を見ていると、それを目敏くイリヤが見つけてきて。

「お兄ちゃんも昔みたいに一緒に寝る？」

「え……えっ!？」

とからかわれ、となりに座っている桜は驚きの声をあげて固まってしまった。

「なんでさ……じゃなくて。桜は生活用品をもう運んだのか？」

「昔……いっ……あ、まだです。玄関においたままでした」

「じゃあそれをイリヤのとなりの部屋にでも運ぶか」

立ち上がり玄関に向かうと、わたしもいきますと桜も答えて着いてきた。

後ろで「シロウも一緒に寝ればいいのに」とすねていた姉は聞かなかったことにした。

おかしい、居間から玄関はこんなにも遠かったのだろうか。

後ろからくる強いプレッシャーのような視線が体を重くしている気がした。

「せ、先輩。その、昔みたいになって……」

「あー、それはだな。……俺がまだ小学生の頃の話であってだな、中学に上がってからはそんなこと一切なかったからな」

「……そうですか。もしかしてお風呂も」

「……」

「……そうですか」

「……」

——玄関が遠いっ!!

桜の日用品は薄いピンク色の小さめのキャリーバックにまとめて入っているらしく、それなりの重さであったがそれよりも空気がとんでもなく重かった。

「ねえシロウ、サクラはどうしたの？なんか不機嫌じゃない？」

襖をはさんだとなりの部屋で桜はキャリーバックから中身を仕分けしており、俺たちはイリヤの部屋で二人イリヤが小さな声で尋ねてくる。

「さ、さあな」

「ふーん。……サクラもシロウと一緒に寝たいならそう言えばいいのにね」

「もう、なんでさ……」

なにか精神的に疲れた昼過ぎだった。

3 時になったのでおやつと言うわけでもないがさつま芋をアルミホイルで包んでグリルで数十分加熱し、焼き色をつけるためひっくり返してもう十分ほど加熱する。

先ほどから桜はイリヤに何を吹き込まれたか知らないが、昼頃までのラスボス感
はなりをひそめてどこかそわそわしているようだった。

俺の方をチラッと見ては何かを言いかけ、俺が桜を見ると桜はすぐに視線をそらす。

そのようすを朝食と同様のニマニマとした顔で見てくるイリヤ。

こんな光景が焼き芋が出来上がるまで数十分続いた。

チンツと高い音でタイマーの終わりが告げられ、竹串でアルミホイルを刺す。

するとぷすつと柔らかく深くまで刺さったので、タオルに巻きながら取り出して
後ろで興味深く様子をうかがっていたイリヤに渡す。

「あち、ち。これも一年ぶりになるのね」

嬉しそうな顔でボイル包みの焼き芋を受け取り、テーブルへと戻っていく。

もう一本も取り出してイリヤを目でおっていた桜に声かけて手渡す。

「ありがとうございます」

「やけどに気を付けてな」

最後の一本も取り出してグリルを閉め、桜と一緒にテーブルへと向かう。

テーブルにはホイルを真ん中で上手に割ったイリヤが焼き芋の断面をキラキラと眺めていた。

「焼き芋ってほんとキレイよね。それに良い香りでおいしいし」

「イリヤさんは焼き芋も好きなんですね。……んしょ。あっほんとだ。蜜も出てますね」

「今回は良いやつが店頭に並んでたからな。まだ少し残ってるから残りは大学芋にでもしとくか」

はっふはっふと小さな口で四苦八苦しながら食べているイリヤを見て少しほろが緩む。

桜もそんなイリヤを見ながら幸せそうに食べている。

「あー、ほんとうまいな」

アルミを割ると湯気の中から少し黒く変色した紫色の皮におおわれている蜜のつまった黄金色の生地が見えてくる。

それに息を吹き掛けながら一口食べて、自然に漏れた感想だった。

なんだかとても疲れた今日にようやく人心地つけた気がした。

焼き芋を一人丸々一本たいらげて、かなりの幸福感のなかお茶を注ぐ。

「お好み焼きを作り始めるのは5時頃からいいとして、あと2時間ほど何かしたいものでもあるか？」

「そうですね。もう洗濯物も畳んでありますし、掃除もやったばかりだから——」
「いやそういんじゃないくてさ。俺が言いたいのはなにか三人でできる遊びとかかな」
「じゃあ、じゃあ！ボードゲームなんてどう？シロウの家にいろいろあったよね」
「あー、ボードゲームか、久しぶりだな。どこにあるかちょっと探してくる」
「そうして俺は一度席を立ち、居間を後にする。」

「とりあえずカタンと人生ゲームとモノポリーがあったかな」

見つけてきた三つのボードゲームをテーブルの上に置く。

「えーと、モノポリーは一応知っていますけど、カタンって一体どんなゲームなんですか？」

「サクラってカタンを知らないの？結構有名なボードゲームよ」

「イリヤも最初は知らなかったじゃないか。俺と爺さんと3人で始めてやっただろ」

「いいじゃない、もう知ってるもの！ドイツの有名なボードゲームなんだから！」
はいはいと俺は流して桜にカタンについて簡単に説明する。

「カタンってのはだな、資源を集めて誰よりも先に10ポイント集めたら勝ちなゲームだ。ポイントは開拓地や——」

数分かかる説明をしながらマップタイルを準備していく。

正直聞くより慣れよのゲームなので一回桜に教えながらすることにした。

「じゃあ桜も初めてだし、俺らも久しぶりだから初心者ルールで始めるか」

「そうね。順番はサクラ、わたし、シロウね」

「はい、よろしくお願いします」

こうしてとりあえず桜にこのゲームの楽しさを教えるために、俺はいつもよりもトレードを多目に使って街道を広げ道王となり、イリヤは相変わらず発展カードを引きまくって騎士王となっていた。

桜もあたふたしながら俺からカードを交換しては街道を敷いたり都市を建てたりと楽しんでくれた。

「おいイリヤ！盗賊をそこに置くなよ」

「そののじゃまな開拓地のお返しよ。存分に奪ってやりなさい！」

「あの先輩、麦で羊を交換してくれませんか？」

「そうだな、レンガなら一枚で交換しても良いよ」

「サクラ、シロウよりわたしとトレードしよ！」

こんな久しぶりの賑やかなボードゲームは爺さんとやっていたのを思い出す。

この家にあるボードゲームは大抵が3、4人用で2人用のゲームはオセロとチェ

スぐらいしかない。

それは爺さんがあんまりにも大人げなく勝つので、イリヤと俺が爺さんとはやらず、2人だけでやり始めたからでもある。

そしてその対策として最初に買ってきたのがこのカタンであった。

しかしこのゲームでも爺さんは相変わらず強く、建設の妨害や有利な交渉がそれほどもう大人げなく発揮された。

そんな爺さんに反発して俺らも。

「イリヤ。僕の石2つと——」

「嫌よ！切嗣とはトレードしないわ！」

「じゃ、じゃあ士——」

「俺もパスだよ。爺さんとはしばらく交渉なんてするもんか」

なんて子供まんまなプレイをしていた気がする。

そんな賑やかで懐かしいゲームを俺たちは日が暮れるまでしていた。

ちよつと爺さんに会えた夜ご飯

「あっ！ 10ポイントです」

その一言がこの郷愁のゲームの終わりを告げた。

勝ったのは桜、それも当然のことと俺とイリヤは負ける気こそなかったが積極的に勝つ気もなく、トレードしまくったり、カードを引きまくったりしていた。

「久しぶりだったけど思いの外楽しめたな」

「そうね。次は負けないんだから」

もしかしたら負け惜しみに聞こえるかもしれない感想を言うところ。

「まさか先輩の家にこんなおもしろいゲームが眠っていたなんて気がつきませんでした」

「他にもまだたくさんあるし、桜の受験が無事に終わったら遊び尽くしてみるかと桜も楽しんでくれたようだった。

後片付けをしながらゲームの感想を言い合い、「何であのときトレードしてくれ

なかったのよ」とか、「とっても長い街道を敷いたんですね」とか、いまだにゲームによる若干の興奮が収まらず会話が続く。

そこでちらりと見えた空の暗さに何か引っかかる。

——なにか忘れていているような。このゲームを始める前に何を言っていたっけな。と小さな疑問をもってふと時計を見上げる。

その針が指し示すのは六時近く、実に2時間半も遊んでいたことになる。

一回の試しとしてやったはずなのにどうやら熱中してしまったようだ。

——うん、あれ？

「——あっ、夕食」

「え、……あっ、そうでした！もう6時じゃないですか」

「そう言えばすっかり時間を忘れていたわ」

その事実が気がつくと緩慢としていた片付けが、きびきびとした素早いものへと変わっていった。

「それじゃあ私は芋をすりおろしてきます」

とタイルを箱にしまい終わると桜は小走りで台所に向かい手を洗い出す。

俺もイリヤと二人で三つのボードゲームを持ち、急いでもとの倉庫へと返しに行く。

日もすっかり落ちて、廊下のガラスは夜の冷たい風があたり冷え始めていた。

居間に戻ってきた俺とイリヤは桜のもとへ向かう。

「桜、何か手伝えることはあるか？」

「わたし、混ぜるのやりたい！」

「それじゃあ先輩はホットプレートの準備をお願いします。……えーと、じゃあイリヤさん任せて良いですか？」

今日の夕食は好み焼きであり、イリヤたっての希望である。

まあどうせ気まぐれだろうけど桜が入念な下準備をしてきたおかげか、俺たちが片付けをしていたわずかな時間で手際よく、すでに長芋をすりおろし終えていた。桜はイリヤの申し出を聞き、一旦キャベツを切るのをやめて、たねの準備にとりかかった。

その際俺とイリヤはよく手を洗っていた。

俺はホットプレートを取り出して温め始め、油とキレイに伸ばされた豚肉の入ったトレイを手元に置いた。

桜は小麦粉を丁寧にふるいにかけて、おろした芋と出汁と醤油でできたたねを手早く作ってイリヤにわたす。

受け取ったイリヤはごねごね、ぐにぐにと楽しそうに混ぜ合わせており、次に桜はみじん切りにしたキャベツなどをイリヤにタイミングを見計らってわたしていく。

「イリヤさん、もう少し全体が混ざるようにお願いします」

「はい、こんな感じでいい？」

「はい。バッチリです」

等、きちんとアドバイスも欠かさない。

それだけ今回のお好み焼きには力を注いできたのがわかる。

「桜ー。もう肉を焼けるぐらいに暖まったぞ」

「こちらであと少しです。イリヤさん、最後に少し貸してくださいませんか」

「えーもう終わり？……はい。お玉とってくる」

まだ混ぜたりないのかイリヤは少し不満げなようすで桜にボールをわたしてお玉を取りに走る。

最後に桜がお好み焼きのたねを入念なかき混ぜによって完成させた。

小さな手でお玉をぎゅつとにぎり、桜のとなりに座ってキラキラとした目で指示を待つかわいい姉。

「イリヤさん、もしかしてやりたいんですか？」

「うん！」

俺はそれを見ながら油を薄くしいていく。

「ふん♪ふん♪ふふーん☆」

と、ご機嫌に鼻唄まで歌いながら熱したプレートにたねを流す。

少し大きめな気がするが、桜がとてもやる気に満ちた顔をしているのでうまく返す自信があるのだろう。

それを確認してから俺はその生地の上に豚肉を乗せる。

同じ要領でもうひとつ焼いているところに飢えた虎が帰って来た。

「つつかれたあー。……あら？ いいにおい！」

ここまで聞こえる大きな声とドッドッドツという廊下をならす音でもはや誰であるかは会わずともわかった。

「たっだいまー！ あら、イリヤちゃんも手伝ってるの？ これは期待できそうねー」

「ふっふーん♪ 見てなさい、タイガ。わたしだってやればできるんだから！」

「藤ねえおかえり」

「おかえりなさい、藤村先生」
と挨拶をします。

「——いっ、……よいしょ！」

と豪快にしかし精確に大きなお好み焼きをひっくり返し、少し得意気な顔で俺を見てくる。

「すごいな桜。いつの間にそんなうまくなったんだ？」

「サクラすごーい！」

「あ、……えへへ。その、イリヤさんにももちろんそうなんですけど、本当は先輩にも驚いてもらいたかったんです」

「あーん、もう！ほんと士郎にはもったいない健気さね」

「俺にはって……なんでさ」

「いえ、…あの、そんな……」

藤ねえの発言に俺は嘆息するしかなく、桜は顔を赤くしてうつむき、そして姉二人はまたもにやにやしなからお互い向き合って「ねー」なんて頷きあっている。

「……もうなんでさ」

裏もキレイに焼き上げて、お皿にのせた大きなお好み焼きが二つ出来上がる。

「先輩はもう少し待っていただけますか？」

「ああいいよ。今日はイリヤの歓迎会だし、藤ねえも仕事から帰ってきてきて疲れてるだろうしな」

「士郎氣が利くじゃない。この時期はテストとか会議とか多いから大変なのよ」

「じゃあお兄ちゃん、イリヤって書いてー」

そう言ってイリヤはマヨネーズとソースを両手でもって俺につきだしてくる。

「いやそれは好み焼きじゃないだろ」

「べつに一緒でしょ？何が違うの？」

「いやうーん、違うことはないけど」

ため息をつきながら俺はイリヤからマヨネーズとソースを受け取り、マヨネーズを適応にかけてからソースで大きくイリヤと書いてやる。

「これでいいか？」

「うん、ありがと！」

とイリヤは嬉しそうに受け取って青のりをかけた。

——何か視線が集まってるのを感じる。

「士郎は相変わらずイリヤちゃんに甘いのよねー」

「……せ、先輩、私にもやってくれますか？」

藤ねえはすでにマヨネーズとソースを交差にかけられ、青のりと鰹節をのせたの

をいただきますと言ったあとに食べながらじっとこちらを見てくる。

桜も桜でホットプレートをじっと見つめて、生地をたらしながらこちらを決して見ずに頼んでくる。

「……いいけどさ」

「……ありがとうございます」

小さくうつむいてから、か細い声でお礼を言われる。

「お腹一杯になっちゃうね」

「ねー」

とほんとうに仲のいい姉二人だった。

ひらがなでさくらと大きく書いたお好み焼きを名残惜しそうに食べる後輩の横で、俺もカリカリでふわふわのお好み焼きをいただいた。

「いやー食ったーおいしかったー」

「もう動けないわ……」

「みんなで一緒に作ったからか、いつもよりもおいしかったです」

「……うっ、うぶ」

とても満足そうな女子3人。

イリヤは1枚半で藤ねえは2枚とイリヤのもう半分、そして桜は大きい3枚を余裕をもってたいらげた。

「士郎、そんな顔じゃ作ってくれた人に失礼でしょ」

「え、先輩。……もしかして口に会いませんでした、か？」

「いや、……そんなことは決してない。ただな……」

俺は大きなお好み焼き4枚と特大サイズのを1枚食べさせられた。

2枚目を突如イリヤにとられたと思ったら、大きくハートと内に『おにいちやん』と書かれたものを返された。

それを見て黙り混んだ桜はすぐにもう一枚焼き上げて、何故かまだ食べている最中なのに大きく『先輩』とだけ書かれたものを渡された。

それをなんとか食べあげると今度は藤ねえが『dear Sir O』と書かれたものを渡してきて、最期に桜が「残ったらもったいないので焼いちゃいますね！」と

有無を言わずに特大サイズを焼き上げた。

そして桜か『先輩』と大きく書いていると、調子に乗った姉二人がよく読めない英語とドイツ語で何かを書いて渡してきた。

それを必死に食べていたらなんか爺さんに会えた気がした。

——……もう、なんでさ……。

ちよつと刺激の強い夜

「それじゃあ桜ちゃん。私は帰るけどくれぐれも清く正しい朝を迎えるのよ」
虎は帰り際にとんでもない爆弾を置いていった。

「あなたはまだ14歳。責任をとれる年齢でもないの」

「えっ、その、……あの」

玄関で見送りをしている俺ら三人はなんとも言えない顔で呆然としていた。
それでも藤ねえのこの空気の凍るようなお節介は続き。

「士郎もダメなんだからね。そう言うことにはちゃんと順序って——」

「——もう帰ってくれ」

俺は無我夢中で藤ねえを押しきり、玄関を閉めた。

「……」

「……」

「……」

果たしてこの空気をどうしたらいいのか。

お節介な虎は「それじゃあ、また明日ー」とドア越しに言って帰っていった。

「どうする、お兄ちゃん？一緒に――」

「姉さんももうやめてくれ……」

イリヤが俺をお兄ちゃんと言ってくるときは、大抵めんどくさいことの前触れだと経験上わかっていた。

「――あつ、おい。さく、ら……」

すると桜はうつむいたまま顔を真っ赤にして走り去ってしまった。

「ふふ、姉さんだって。悪くないわ」と笑っているイリヤを置いて、頭をかきながら桜をフォローしに後を追った。

桜を追って居間に戻ると、桜は手を膝に置いてきれいな正座姿で固まっていた。

「気分を悪くしてごめんな。藤ねえも――」

「あのっ！」

とりあえず当たり障りのないことでこの場を納めようと思ったが以外にも桜がさ

えざる。

「……一緒に、寝ることは……いけませんか？」

「……はっ？」

「……イリヤさんと一緒に、……先輩も、ダメでしょうか……」

これはいったいどんな夢を見ているのだろうか。

思考が停止したように頭も体も一切動かない。

「桜。……そういうことは——」

「——いいじゃない、せっかくのお泊まりだもの。シロウも寝る前のおしゃべりを
楽しみましょ」

俺のなんとか絞り出した発言はまたもや遮られる。

「イリヤ。あんまり冗談を言うんじゃない」

「別に冗談なんて言っていないわ。それともシロウはわたしたちと一緒に寝るのはいや？」

「そういう話じゃなくてだな——」

「——私はっ、……先輩を信用しています。それに……」

——この状況でいたい何が正解なんだよ……

「シロウ。わたしからもお願い、……今日だけでいいの。本当に今日だけだから……」
そのイリヤのしおらしい態度に俺は言葉を窮する。

「……わかった。今日だけだからな」

「やったー！やったわね、サクラ！」

「えっと、はい！よかったです！」

先程までのしおらしさは嘘のように、俺の諦めを聞いた瞬間とたんに喜ぶ二人。
俺はため息をついてから、いつもよりも少し早いが心頭滅却もかねて土蔵に向
かっていった。

「シロ、お風呂空いたよ。サクラと一緒に入ったから安心してね」

いつもの鍛練をしているところにイリヤはノックもせずに入ってくる。

「うわっ、ビックリした。よくここがわかったな」

「シロウがいるところなんてわたしはすぐわかったちゃうんだから。あんまりなめな
いでよね！」

そう言っていない胸を張るかわいい姉の姿。

「いや別になめている訳じゃないんだけどさ」

「ふーん。それにしてもシロウの修行ってなんか地味よね。ずっと強化ばかりで飽きないの？」

「まあ、俺はそれしかできないからな。それに何かと便利でもあるしやって損はないからな」

俺の発言にイリヤは長く目をつむる。

「……そうね、便利だものね。便利だから身に付けてる。シロウはそれでいいんだと思う。……ううん、それがいいんだよね」

「どうしたんだ？ 今日はいつもよりわがままだし、何かあったのか？」

「むう、わがままって何よ！ わたしはシロウに素直なだけなんだから！」

「あ、ああ。そうだな、今のは言い方が悪かった。すまん」

「わかれればいいのよ。それじゃ、お風呂入ったら私の部屋に来てね。……待ってるから」

そう言って最後の言葉はこぼれたかのように小さく呟かれ、イリヤはこの場を

去っていった。

「あーあ、腹をくくるか」

鍛練の最後はイリヤによって荒らされたが、それでも心を落ち着かせられたと思う。

何があっても平常心、何があっても平常心と心に決めて風呂に向かった。

はい、平常心は無理でした。

「さ、桜っ!?! その格好は……」

「や、やっぱり、似合いません、か?……す、すみません」

「違うわ、サクラ。これはお兄ちゃんが焦っているときの顔よ」

イリヤの格好は先程の土蔵でも見ていたからわかっていた。

爺さんが買ってきた猫耳パーカーがついた子供用のパジャマであり、今日は三毛猫風だ。

しかしまさかサクラまで、そのシリーズのウサギ耳をつけたパジャマを来ているとは想像だにしていなかった。

イリヤのでは流石にサイズが合わないからいつの間にか買ってきていたのだろう。

しかしその、桜の最近大きくなってきた胸元が、……緩めの柔らかいパジャマによって強調されている。

——ああ爺さん、どうか俺を見守っていてくれ。

もうなんでもいいから天に願った。

——俺を犯罪者にしないように。
と。

「桜がそっちで、シロウがあっちね。わたしは真ん中でいいわ」

ああ、どうかそれで頼むと、決して声に出さないけれどその意見に賛同した。

「え、えっと。……ふつつかものですが、よろしく願います」

「ふふ、こちらこそよろしくね」

「……桜、それは絶対に違うからな。……もう、なんでさ」

その桜の発言には流石に呆れ、少し心も落ちついてきたので改めて二人を見る。

イリヤはこの状況を本当に楽しんでるようで、自身の布団をいそいそと小さい体でその布団に埋もれながら準備している。

桜はこの場に未だ緊張しているらしく、しきりに胸元に手を当てては、すーはーと深呼吸をしながら視線を泳がしている。

——ああ、もう大丈夫だ。

そんな桜の様子を見て、少し可笑しくなって笑いをこぼしてから自分の布団を準備した。

俺の笑いを見て桜はまたビクッと反応していた。

3人ともそれぞれ自分の布団を敷き、その少し空いた隙間をイリヤは引っ張って埋めてきた。

それに文句をいれようとしても、やぶ蛇になりそうなのでもうなにも言わなかった。

そしてそれぞれ自分の布団に入り、俺は口を開く。

「なあ、もしかして焼き芋のときの桜のあの挙動不信感は、このイリヤの入れ知恵

のせいなのか？」

「そつ、そんなに挙動不審でしたかつ？」

「ええそうよ。サクラが何故か拗ねてたんだもの。それなら楽しく寝れるようにしたいじゃない？」

——……この姉は。

しろいこあくまは今回も健在だとまざまざと見せつけられた。

「はあ、そうかい。……まさかこの歳になってもイリヤと寝ることになるとはな。桜ともいっしょに寝ることになっちゃったし、明日は絶対に藤ねえが来るよりも早く起きるからな」

「……」

「えー、でももし見つかったら次はタイガとも一緒に寝られるかもしれないじゃない」

「あんなあ、もう何歳になったと思ってるんだよ」

「何歳だろと関係ないわ。シロウはシロウ。わたしの弟でお兄ちゃんなんだから」

「……」

イリヤとその場しのぎの会話を続けていると、ふと桜がずっと黙っていることに気がつく。

「……桜？さっきからなにも話してないけど大丈夫か？」

「えっ？はいっ！わたしはいつでも大丈夫です！」

「もうサクラったら。いつまでそんな固くなってるのよ。せっかく来たんだから楽しまなくっちゃ損なんだからね」

「えっと、……はい。そうですよね、楽しまないともったいないですよね！」

イリヤも桜を心配してか、やさしく論していく。

「なんだ、大丈夫なのか？」

「はい。もう本当に大丈夫です」

「そうか。それならいいんだけど、それで何を話すんだ？」

布団が暖まってきてちょっと気持ちよくなり、緊張した空気も会話を続けていくことで徐々にゆるまってくる。

「そうねえ。やっぱり話すことと言ったらシロウの昔話かな」

「おい」

「わー！とても聞きたいです！先輩の昔話ってことは小学生のときもあるんですか？」

「もちろんあるわよ。そうね、何から話しましょうか」

「……頼む姉さん、やめてくれ」

この空気に俺の発言なんてなんの意味がないことには俺が一番わかっていた。「……あれはわたしがこっちに来て、初めてシロウに会ったことね——」
そう言って、イリヤは俺と初めて会ったときのことを語り始めた。

ちよつと昔話をひとつ

——本当に俺なんかがその子に会っていいのかな。

爺さんに拾われてから2年目のことだった。

ボロボロの荒れ放題であつたこの大きな家を一年がかりで修復し、たまに居なくなつては帰ってくる爺さんと二人で暮らし始めた。

ピカピカにした道場では、色々と世話になつた藤ねえによる稽古と称したしごきの日々を送ってきた。

——そんな忙しく傷の絶えない生活のなかでも、片時も忘れられないあの顔に、全てを失つた俺は憧れていた。

泥だらけになつたボロボロの服に、折れた柱やガラスの破片などをどけてできたのであろう傷だらけの手で、意識が焼け落ちそうだった俺を見つけてくれた。

その微かに残る意識のなかで見たあの顔は、いったい何に救われたのか。

あの時に泣いて喜んでいたのは、爺さんに救われた俺ではなく、俺を救った爺さんの方だったのだから。

はたして爺さんは、救われた俺からいったい何に救われたのだろうか。

俺はその涙して喜ぶ顔を忘れることができない。

だから俺はあの顔に。

あの救われた顔に俺は。

あの何かに満ち足りた顔に、全てを失い空っぽになった俺は故に憧れたのだ。

今思えば、俺はその何かに満たされたかったのだろう。

この家で過ごしてから二年がたって、今までになく長い期間家を空けた爺さんがようやく帰ってきた。

長旅でかなりよれたコートを着ていた爺さんは、しかし開口一番で俺に嬉しそうに話しかけてきた。

「イリヤがこっちに来れるようになったんだ！……ああごめんね、そんなこと言ってもわからないか。今さら戸惑うかもしれないけど、僕の本当の娘がこっちに来る

んだ」

その言葉に俺は躊躇した。

「良かったじゃん」

その場で曖昧に頷き、爺さんの喜びを妨げないようにしながらも俺は考えてしまった。

——果たして俺はその子に会っていいのだろうか。

その子にとって俺はいつたいどんな存在だろうか。

俺は爺さんの過去をほとんど知らない。

それを爺さんは話そうとしないし、俺は聞こうとしない。

爺さんに娘がいただなんて初めて聞いた。

それじゃあその子の母親はどこにいるのだろうか。

その事も俺は聞かなかった。

なんとなくその人が今どこに居るのか、今どこに逝ってしまったのかが、あの救われた顔からわかっていたから。

——俺はその子に会っていいのだろうか。

——俺はその子に爺さんを、この人を帰すべきではないのか。

——俺はやっぱり教会に——

答えのない自問自答の日々だった。

それでも時間は流れ、答えの出せないまま冬が来た。

今日その子がやって来る。

果たして俺はどこに立てばいいのか。

爺さんのとなり？ 後ろ？ それとも前か？

どこにも立つことはできない。

できれば隠れたかった。

そのままその子と爺さんが一緒に帰ってくれてもと、その時は望んでいたかもしれない。

そんな俺の不安をよそに、爺さんは俺をとなりに立たせる。

すると一台の大きな黒塗りの車が目の前に止まった。

運転する人は清楚な格好の女性で、こちらには目線を合わせようとしない。

むしろ敵意すら感じる雰囲気です。車から降り、後ろのドアを丁寧に開いた。

そこには美しい銀色の髪の子が目を輝かせて座っていた。

俺はその子を見て思わず一步下がる。

そしてその子は。

「——きりつぐー！」

と車からかけ降り、爺さんの名前を大きな声で呼びながら抱きついた。

俺はさらに目を伏せてしまう。

その光景があまりにも眩しくて、俺はここに居てはならない影のようだと錯覚してしまいそうだった。

しかし爺さんの胸に顔を埋めるようにして抱きついてたその子は、ちらっとそんな俺を見てこう言った。

「あなたが切嗣が助けた子ね。わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツ

ベルン。あなたのお姉ちゃんなんだからね！よろしく、お兄ちゃん！」

そんなめっちゃくちやな挨拶をしてきた。

「あ、ああよろしく。姉さん」

混乱して反射的に俺はそう答えてしまい、後ろめたい気持ちが沸き上がるっていると。

「——んんっ！切嗣っ、私お姉ちゃんになったわ！」

「ああ、よかったね。お姉ちゃんになったイリヤが弟の士郎と仲良くしてくれると僕も嬉しいよ」

いまだに爺さんに抱きついて、その子は爺さんの胸のなかで感慨の声をあげるとすぐに顔をあげて爺さんと会話をしていた。

「……うん、こほん。そういえばまだあなたの名前を聞いてないわ。レディが先の名乗ったのだからそれを返すのが礼儀でしょ？」

そしてようやく抱きついていた腕を離し、小さく咳払いをしてから佇まいをただしてそうその子は問うてくる。

「俺はえ、……衛宮、士郎。士郎って呼んでくれ」

「エミヤ……シロウ。うん、シロウね。じゃあわたしもイリヤって呼んで。親しい人はみんなそう呼ぶの」

名前を言うのに少し躊躇していたが、するとその子から思いもよらない提案がきた。

「わ、わかった。……イリ、ヤだな。うん」

「違うわ、イリヤよ。イ・リ・ヤ！もう一回！」

「何が違うんだよ。そう言ったじゃないか」

「ううん、言っていないわ。ほらもう一回！」

何が不満なのか分からず、その子はそう急かしてくる。

「……イリヤ」

「もっと大きな声で！」

「ああもう、……イリヤっ！これでいいかっ？」

「うんっ！よろしくね、お兄ちゃん！」

これがイリヤと初めて会ったときの出来事だった。

そのときの爺さんの顔はあまり見ていなかったが、確かとても嬉しそうだったよ
うな気がした。

「シロウが料理するの？」

運転をしていた女性はそのまま車を走らせてどっかへ行ってしまったので、イリ
ヤだけを家に招き入れた。

そして今は正午近くの、冬であるけれど少し暖かな日が当たる時間になってきた
ので昼食の準備を始める。

「まあそうだよ。爺さんは料理ができなかったからさ。俺がするようになったんだ」

「ふーん。……ねえねえ、料理って楽しいの？」

「いや、どうだろ……」

料理をすることに楽しいと感じたことはあまりない。

ただ料理がしたいなど、それで俺は誰かの――

「楽しくないの？じゃあなんでやってるの？」

「……」

イリヤのその言葉に俺は答えることができなかった。

「でもシロウ、料理してるとき楽しそうだったよ？」

「——えっ？」

「気づいてなかったの？ 今日は何々にしようって楽しそうに呟いてたんだから！」

——そうなのか。

俺は料理を楽しんでいたのか。

料理をすることに、それを食べてもらうことに、俺は楽しみを感じていた。

俺はその事をイリヤに初めて教えられた。

それが空っぽになった俺をちょっとだけ埋めてくれた出来事だった。

「今日はシロウと一緒にいるわ！」

元気はつらつなイリヤは夜になっても衰えることを知らなかった。

爺さんがイリヤと一緒に風呂に入ろうと誘うとイリヤがそれを断り、まさかの俺と一緒に入ると言ってきた。

それを爺さんはじゃあ三人で入ろうと提案するとイリヤはまたも断り、俺と二人で入ると主張していた。

それにとっても悲しそうな顔をしている爺さんの横で。

「俺は一人で入れるよっ！」

と大きな声で主張した。

さすがに女の子と一緒にお風呂に入るのは恥ずかしいし、それも今日初めて会ったかわいい子だなんて。

しかしこの場で俺の意見なんて今も昔も通るはずがなかった。

それでも。

「シロウはわたしの弟なんだから、わたしが洗ってあげる！」

その事だけは断固拒否したのだった。

夜は三人で川の字になって布団を敷いて横になった。

布団は2つ敷き、爺さんが1つを使って俺とイリヤはまだ小さかったから1つだけで十分だった。

そこでも何故かイリヤが真ん中に寝て、爺さんと俺が挟むように寝ていた。

この場ではイリヤの主張は絶対であることは、もう抗えようのない事実であった。そして爺さんとイリヤが二人で楽しそうに何かをしゃべっていたので俺は眠くなり、目をつむると突然手を握られた。

驚いて目を開けると。

「おやすみ、シロウ」

とやさしく微笑まれて声をかけられた。

「お兄ちゃんが家族でよかったわ。これからよろしくね、大好きなシロウ」

今日会って1日でその子の、——イリヤの性格がよくわかった。

とても子供っぽくてわがままで、疑問に思ったらすぐに聞いてきて、何も知らないように見透かされているような、とてもかわいくてやさしい姉さんだった。

ちょっと垣間見える神秘

「——ん」

自然と意識が覚醒する。

障子からは光がさしこまれており、どうやら日が昇っているようなので起きるにはちょうどいい時間だ。

しかし、とても懐かしい夢を見ていた気がする。

起きたときにはきれいにその内容が抜けており、いったいどんな夢を見ていたか思い出せないが掠れた追憶のなんとも言えない物寂しさがあった。

それは明晰夢のように少し俯瞰しながら、それでもその過去を体験していたかのような充足感が残っている。

そして夢疲れが少しあるにしても、今までになく体調がいい。

体の疲れがとれている感じがするし、特に腰や首に違和感がなくて頭もスッキリしている。

ああ、なるほど。

——そうか、これが布団で寝ることなのか。
久しぶりに布団で寝た感想であった。

体を起こそうとすると右手に違和感があり、少し氣を向けてみるとどうやら手を握られているようだ。

もちろんその相手はいまだすやすやと幸せそうに眠っているイリヤであり、おそらくその反対側では桜の手も握っているのだろう。

ふと、そういえばいつのまに俺は寝ていたのか。

イリヤが桜に向かって俺の過去話をいろいろと話していて、それは違うと反論したり、恥ずかしくなって悶えたりしていたのを思い出す。

しかし俺がイリヤの話を止められるはずもないので、恥ずかしさから逃げるため布団にもぐったらそのまま寝たのか。

そういえば薄れゆく意識のなかで微かに感じたことで、手をやさしく握られて『おやすみシロウ』とささやかれた覚えがある。

いや、それはもしかしたら夢のことだったのかもしれないが。

でもまあ。

「おはよう姉さん」

そう呟いてから俺は握られている小さな手を姉さんが起きないようにゆっくり外し、普段着に着替えるため自室へと向かった。

服を着替えて居間に入るとそこは冬の朝の震えるような冷たい空氣に満たされていた。

サブサブと呟きながら急いでストーブをつけて暖をとる。

もうそろそろこたつも出そうかと考えながら、ストーブにかざして暖まってきた手を擦り合わせていると。

「おはようございます、先輩」

「おはよーお兄ちゃん」

と少し不機嫌そうな桜とご機嫌なイリヤがパジャマから着替えた普段着の状態で朝の挨拶をしてくる。

「おはよう。どうしたんだ二人とも？」

そんな二人に挨拶を返し、朝から対照的な二人に疑問を向ける。

「いえ、別になんでもありません」

やはり少し不機嫌な桜は俺のとなりに来て、俺と同じようにストーブに手をかざして暖を取り始めた。

そのいつもよりも近い距離に少し緊張する。

「サクラはねー、わたしには挨拶してくれなかったーって不機嫌なの。ふふふ、かわいいわよね」

「イ、イリヤさん……」

そう言って、ご機嫌なイリヤは少しうつむいた桜とは反対側の俺のなりに座り、ストーブに手をかざす。

朝から二人の近さに少しドギマギしながらも果たしてなんのことかを考える。

——挨拶ならさっきしたのにどういふことだろうか？……いや、桜は居間に来てからすでに不機嫌だったな。

「……あつ。もしかしてあのときにもう起きていたのか？」

「ええ、シロウが体を起こしたときに目が覚めたわ」

徐々に体を密着してくるイリヤから少し避けると自然に桜と近づいてしまった。

「……んっ」

すると今も変わらず私不機嫌ですオーラを醸し出していた桜に少しヒビが入る。ストーブで暖まったのか素肌が段々と赤くなり、かざしている手も震えだして暑気（あせ）が壊れ始める。

「えーと、だな。桜あれば――」

「――も、もういいです！ えと、あつ、お茶をいれてきますね！」

すると桜は強い言葉とは裏腹に、もうそれほど怒っているようには感じられない口調で立ち上がる。

そして何故か最後にイリヤに向かって小さく頭を下げてから台所へと向かった。それについて尋ねるように俺はイリヤに目を向けると、イリヤはそ知らぬ顔で淡くオレンジ色に光るストーブを見続ける。

そして「暖かいわねー」と俺に密着しながら自身の手をストーブにかざしながら揉んでいた。

部屋の空気も暖まり、万全に活動できるようになってから朝食の支度を始める。俺と桜は台所で朝食の献立を話し合い、イリヤは一人で占有したストーブに向かつてあくびをしていた。

イリヤのためにも今朝は洋風にしようと言うことで話がまとまり、食パンを焼いてベーコンつきの目玉焼きをのせる。

3、4枚目を焼いているところで藤ねえもちょうど来たので、出来上がった2枚をイリヤと藤ねえに食べてもらった。

さて、今朝の献立は目玉焼きをのせたベーコントーストに手作りのイチゴジャムを入れたヨーグルトと少し甘めの暖かいココアである。

イリヤお嬢様の感想ではこういうシンプルなものも悪くないわと、大変ご機嫌うるわしゅうご様子であった。

朝食を済ましたら今日の洗濯物を干しに行く。

桜の服は次の日に帰るからと洗濯に出されておらず、そのため洗濯物は俺とイリヤの衣服とタオルぐらいである。

干すことを桜に毎回別にやらなくていいよと断ってはいるのだが、桜はお世話になっていたのでの一点張りで一緒に干すことになっている。

今回もこの恒例の儀式のようなものをしてから桜とイリヤの3人で干すこととなった。

ちなみに藤ねえは食ったその後、横になったままである。

イリヤが洗濯かごから服を取りだし、広げた状態で俺と桜に渡す。

そして俺と桜はそれを干すとをただタンタンと繰り返した。

特段にイリヤは自身の洗った衣服を見られることに恥ずかしがったりはしないので、普通に広げて手渡されてくるのだが、それを桜は目敏く素早く受け取ったので結果イリヤの服はすべて桜が干していた。

——まあ、こちらとしてもその方がありがたい。

とこっ恥ずかしくて口には決して出さないがちょっと安堵した。

居間に戻って時計を見ると、短い針は9時を通りすぎていたので俺はこれからの支度を始める。

「今日は3人ともどうするんだ？俺はバイトがあるからもうすぐ出掛けるんだけど」

「えー。シロウ今日はいないの？」

「昼過ぎには帰ってこれると思うけどな」

案の定イリヤはブーたれるがこれも生活のためなのでしょうがない。

「そうなんですか、ちょっと残念です。私は昼前に帰る予定ですのでこれで一旦お別れですね」

「うーん、わたしは今日休みかなー。昨日に全部済ませてきちやっかし」

「へー、じゃあタイガはいるのね」

「あの、それじゃあ3人で買い物しにいきませんか？」

「買い物？何を買うの？」

「おー、いいね桜ちゃん！パーつといこーか。少しぐらいならお姉さんおごっちゃうよ」

「はい。イリヤさんに服とかプレゼントしたいんです」

そう3人で盛り上がっていたので俺は静かに居間を出る。

イリヤは買い物と聞いて目をキラキラとさせていたし、桜と藤ねえもイリヤにはどんなのが似合うかとウキウキと語り合っていた。

そして俺はコートとマフラーで防寒対策をして、いざバイト先の飲み屋『コペンハーゲン』へ出発する。

「おはようございます、ネコさん」

まだ開店していない店に入り、お酒の在庫管理をしているネコさんに挨拶をする。ちなみにネコさんとは蛭塚ネコさんと言う方でネコをどう書くのかは教えてもらってない。

「おう、エミヤン。おはよう」

俺に気がつくを取り出していた酒を戻し、メモ用紙も丸めてポケットに入れてから近づいてくる。

「エミヤンさあ、来て早々悪いんだけど、今日は柳洞寺にケース2つを運んで行ってくれないかなあ。それが終わったら今日はもう上がっていいから」

「えっ、寺にですか？寺って禁酒の場所じゃなかったでしたっけ」

「あー、いいのいいの。あそこ生臭だし、常連だから」

「それならいいんですけど……。ケース2つですか、わかりました」

「ほんとごめんね。零くんが昨日の夜に急ぎで注文してくるからさ。いつもならアタシが運んじゃうんだけど今日はどうしてもねー」

ネコさんは本当に申し訳なさそうに話してくる。

しかしこれは確かに大変な仕事だ。

ケース2つと言うことは40キロはくだらないだろう大荷物を、ただでさえここから遠い柳洞寺へと運ぶのだ。

さらにそこには地獄の階段を上らなければならない。

俺は「よし」と掛け声を呟いてからケースを台車にのせて出発する。

まだ朝の冷たい空気のなかでガタゴトと路面に小さく弾かれながら瓶が割れないように注意を払って進む。

人が少なかったのでここまでたいした問題も起きることなく円蔵山の裾まで来れ

た。

——さて、ここからもう一踏ん張りだ。

俺はケースをどけてから台車を畳み、邪魔にならないように階段の端に立てかけて2つの酒瓶の入ったケースを抱える。

これからこれを持ってこの少し長い階段を上るのかと思うとちょっと辟易するが、ここで立つててもなにも解決はしないので気合いをいれて俺は登り始めた。

腕が少ししびれながらも山門までたどり着く。

冬の気温のせいかな空気が重たく感じ、疲労が余計にたまる。

「——そこな少年。少し待たれよ」

山門の前を過ぎる時に突如横から声かけられる。

「——えっ」

「ふむ、それは酒か？どれ一升もらうでしょう」

突然の声に驚きながら振り向くと、横にいたのは長髪の髪を後ろで1つにまと

めた髪型で軽い羽織を纏った優男であった。

そして軽い調子で手を伸ばされ、ケースから瓶を1つ抜き取られる。

両手が塞がっているせいもあり、そしてあまりの自然な動作のせいで俺はただその手を追うことしかできなかった。

「——あつ、おい！」

我に返り、取られた瓶を取り返そうとその優男に呼び掛けながら目線をあげると。

——そこには誰もいなかった。

「えっ？」

一瞬呆けてしまい、すぐに気を取り直してケースを見てもやはり一本抜かれてい
る。

回りを見渡し。

「おい、どこにいるんだ。それを返してくれ」

誰もいない山門で俺は一人叫んだ。

しかしその声は脇の林の中へと吸い込まれるようにして消え、俺しかない山門
はまた静寂さに包まれる。

明らかに自然なことではない。

普通なら警察に届けるべきなのだがどこか神秘の気がして躊躇してしまう。

果たしてどうしたものかと逡巡していると。

「なんの音かと思ったら士郎くんじゃないか。こんな朝早くにどうしたんだい？」
寺の方からがたいのよい、黒い作務衣の坊さんがやってくる。

その声に俺は自然と背が伸びてしまう。

「あっ零観さん、おはようございます」

「ああ、おはよう。ふむ、一成を来させようか？……ん、ああそうか。ネコ君の代わりにお酒をここまで運んできてくれたのか」

その人は柳洞零観さんで俺の親友の一成の実の兄にあたる。

「はい、そうなんですけどここに来る途中で瓶を一本……」

果たしてなんと言おうか俺は迷っていると。

「ああ、割ってしまったんだね。まあ無理を言っただけで急ぎで運んでもらったんだ。全額払わせてもらおう」

「えっ。いやそれは――」

素直にわけを言えることができずに言葉に迷っていると、零観さんは俺が積み上げて持っている上のケースをひょいとり、そのまま柳洞寺に向かってしまった。こうして俺は申し訳ない気持ちのまま代金を全額いただいてしまったのだった。

ちよつと衛宮さんちの今日のごはん

その後コペンハーゲンに一度戻ってネコさんに代金を渡し、気分は優れないが予定より早くバイトが終わってしまったので商店街を通りながら帰路につく。

零観さんにはそれとなく山門周辺で最近何か異変はなかったかと聞いてみると、夜な夜な人影を見たり、呟くような声が聞こえたり、ヒュンヒュンと風切り音が響いたり幽霊騒動がにわかにあるらしい。

もしかしたら霊的なモノでも憑いているのかも知れないので、帰ったらイリヤにでも相談しようかと帰り道にタンタンと考えていた。

家についてもまだ昼前で誰も帰ってきておらず、することもないので前々から考えていた余ったさつま芋で大学芋を作ることにした。

まず立派なさつま芋を3本取りだして軽く水洗いをし、一口大になるように適当な大きさに切ってからもう一度水にさらす。

汚れがとれたらラップにくるんでレンジで加熱し、実がきれいな黄色になり、芯がとれてホクホクとなったら水を拭き取って油でサッとあげる。

そのとき、レンジで空いていた時間で砂糖と醤油とみりんの合わせに、塩を入れて整えたものを鍋に入れて加熱しておく。

合わせたタレがブクブクと沸騰したら軽く揚げたさつま芋をトバツと放り込み、よくタレと絡めるように転がす。

甘い蒸気の香りとアメのような照かりが出でしたら火を止めて、これで大学芋の完成だ。

一口試しに食べてみるとかなり熱くてハフツハフツと苦戦しながらも噛みしめると、表面はカリッと歯応えがあり、中はホックホクのもふもふとした少し甘めの大学芋であった。

「うーん、これは砂糖を入れすぎたな」

と思わず漏れた感想に反省をしながらも使った鍋に水を入れ、鍋を加熱してアメ状になったタレを水に溶かす。

その間に使用した器具を洗剤で洗いながらついでに昼食は何にするかを考える。

先によった商店街の魚屋でよく脂ののった冬鯖が安く売られていたので思わず数匹買ってしまった。

それを昼に出すのも悪くはないがどうせなら煮付けて夜にだしたい。

他にないかと思案しながらタッパーに移して放冷していた大学芋を冷蔵庫にしま
うと。

——メンか。

ふと目についた中華麺に気が引いて、野菜室のキャベツとニンジン、ネギに大根、
冷凍庫の刻んだ玉ねぎと豚肉を確認する。

——これは焼きそばだな。

と合点したので豚肉を自然解凍するため外に出しておく。

さて、これで昼までやることなくってしまった。

……しょうがないから期末の勉強をすることにした。

「たっだいまー！……あれ？シロウの靴がある」

「おじやまします。あ、ほんとですわね」

「買った買ったー。しばらくは節約しなきゃね」

と、日本史の勉強をしていたところでまさしく姦しい声が響いてくる。

「おかえりー。予定よりバイトが早く終わったんだ」

教科書を片付けてからこちらにも声をあげ、3人が向かった居間に俺も向かう。

「――お、」

そして居間に入り、目にしたのは。

「――とても似合ってるじゃないか。桜と藤ねえに感謝だな、イリヤ」

胸元に白い三日月のワンポイントがある赤いタートルネックに、薄ピンク色のふわりとしたスカートを纏ったイリヤがちょこんと座り、こちらを見つめながら手を広げて服を見せつけていた。

その様子を桜は両手を顔の近くで合わせてにこにこ見守っており、藤ねえも腰に手をあててフンスと頷いていた。

イリヤも俺の感想に満足したのかやったーと飛び上がって抱きついてきた。

「イリヤさんの誕生日を聞いたんですけど、誕生日は11月の二十日はっかだそうなので、ちょっと遅めのプレゼントってことにしました」

「そうなのよねー。イリヤちゃんは毎年12月になって来るから誕生日をなかなか祝えないの。それにあのときは祝う時期でもなかったし」

抱きついてきたイリヤの頭を撫でながら、二人の話に加わる。

「そういえばそうだな。いつも冬しか会えないから誕生日を祝うなんて思いもつかなかったよ」

「別にプレゼントなんていっだって良いじゃない。わたしは今貰えて幸せよ?」

「うーん、そうなんだけど。……そうだイリヤ、来年はもう少し早くこれないか? どうせならみんなでイリヤのことを祝いたいんだ」

「へー。士郎にしては良いこと考えるじゃない」

「はい! それならぜひ参加させてください」

俺の提案に藤ねえと桜が嬉々としてゐる。

「……そうね。来年ならこれまでより早く来れると思う」

するとイリヤは俺にしがみつき、胸に顔を埋めながら答える。

どうやら誕生日を祝われることが慣れていないために少し恥ずかしいのだろう。俺はやさしくイリヤの柔らかな雪のように輝く銀色の髪をすく。

「じゃあ決まりだな」

「そうですね。私、大きなケーキを作っちゃいます」

「うーん、そういえば来年はイリヤちゃんの18歳の誕生日よね。たしかー、ドイツだと18で成人だからその日は赤飯を炊かないとね」

と決定すると二人はそれぞれ意気込んでいた。

——そうか、成人なのか。

藤ねえの意外な知識によって新たな事実も発覚し、なにしようしようかと俺たち3人で盛り上がる。

その間、イリヤはずっと俺に抱きついたままだった。

イリヤの誕生日の話も終えて一度席につき、話はさつき行ってきた買い物に戻った。

「——それでワンピースかプリーツのどちらにするか悩んだんですけど、イリヤさんのふとした瞬間に見える上品な振るまいを思い出してこう、びびっと来たんです」

「あー、そうよね。イリヤちゃんって普段はきゃーって感じの明るくてかわいい見た目相応な感じなのに、たまーにしゃんとして大人っぽくなるのよね」

対面に座っている桜と藤ねえによるイリヤの印象が述べられる。

その感想にイリヤがどう思ってるのか少し気になりイリヤを伺ってみると。

「……お兄ちゃんはどうちのわたしが好き？」

とイリヤもこっちを向いて、まさかの問いを小さな声で投げかけてくる。

「どっちって……。どっちもイリヤだろ？両方好きだよ」

「ふーん、そっかそっかー。……わたしもそんなシロウが大好きよ」

その言葉に「ははは」と照れ臭くなって笑ってごまかし、視線をそらして時計を見る。

そのみじかな針はあと少しで11を指し示すところだった。

「……あっ、桜。時間は良いのか？たしか昼前までだっただろ？」

「えっ。……あ、もうこんな時間だったんですね。楽しくて時間が一瞬出すぎてし

まった感じがします」

「うーん、サクラはもう帰るのね」

「えー、どうせなら昼までいれば良いのに！桜ちゃんの作るお昼ご飯食べたかったなー」

「藤ねえ……」

皆が桜の帰りを惜しんでいるがそれでも桜は「すみません、兄さんが待っていますので」とわざわざ謝って断る。

「そっか。ごめんね桜ちゃん、無理言っちゃて」

「いえ、こちらこそこんなに惜しんで貰えて嬉しいぐらいです。その、……また機会がありましたら先輩の家に泊まっても、いいですか……?」

「ああ、いつでも構わないよ。部屋はたくさんあるからな」

「サクラ、また一緒に寝ようね！」

と言って、桜は立ち上がり荷物をまとめに自身の部屋に向かっていった。

「それじゃあ俺もそろそろ桜には劣る昼食を作ろうかな」

サクラを一旦見送ってから、俺も昼食の準備にとりかかる。

「どうしたのよ、士郎。すねてるの？」

「まあ、あのお好み焼きを見せられたらな。もう教えられることがないんじゃないかと思えてくるよ」

「たしかにあのお好み焼きは今まで食べてきた中で一番美味しかったわ。でもわたしはシロウが楽しそうに作った料理が一番好きなんだから気にすることないわ」
「うんうん。それとね、士郎。弟子はいつか師匠を追い抜くもの。それを嬉しむことができずにいつまでもくよくよしていちゃ師匠失格よ」

イリヤと藤ねえのありがたいお言葉をはいはいと流して俺は解凍していた豚肉の様子を見に行く。

——それでもやっぱり悔しいんだよな。

と柄にもなく俺は感じて、そんな感情にも肩を落とした。

その後まだ日が上っていることもあり、玄関で見送りながら「お邪魔しました。お土産も貰えて、とても楽しかったです」と桜は一人で家に帰った。

こうして慌ただしくも結構楽しかった桜の初めてのお泊まりは終わりを迎えたのだった。

「そういや藤ねえはいつまでいるんだ？」

俺は刻んで冷凍した玉ねぎを外にだして、キャベツを一枚一枚洗いながら尋ねる。
「今日は夜までいるつもりー。来週から本格的に忙しくなるからしばらく来れそうにないのよ。たぶん次は冬休みに入って落ち着いてからねー」

テレビのリモコンを片手に、藤ねえは読みもしない新聞を手にしてテレビを見ながらぶっくらぼうに答える。

「ふーん、タイガも大変なのね」

とイリヤは大根を両手で持ち、足を伸ばして太ももでおろし器と皿を固定して、ギコギコとすりおろしながら藤ねえに適当な相づちを打つ。

なぜ大根を下ろしているかと言うと、イリヤが俺に手伝えることはないかと聞いてきたので、それじゃあ大根おろしをよろしくということになった。

そしてイリヤの今の格好は桜にプレゼントされた服が汚れるのを嫌ってか、聞い

てからすぐにいつもの見慣れた洋服に着替えていた。

よほど大事に着るつもりなのがありありと伝わってきて、ほほえましい気持ちになる。

さてと、キャベツが洗い終わったので目線を手元に戻し、食べやすい大きさに切ってから適当なボールに移す。

次にニンジンを取りだして皮をピーラーで剥いてから、同様に食べやすい大きさに切ってボールに入れる。

青ネギは薬味として先の方を小さく切り出し、輪切りにしてから小皿に移しておき、最後に解凍したこま切れの豚肉を取る。

豚肉には塩コショウをふってなじませるように少しもみ、焼きやすいように一枚伸ばしておく。

中華麺は少しもみほぐしてから袋ごと包丁で半分に切り、ザルに取り出して麺の表面に付いている油を水で軽く洗い流す。

その後ペーパータオルで水気を取って料理酒を少しかけてなじませた。

こうして料理の簡単な下ごしらえは終わった。

昨日好み焼きで使ってから洗っておいたホットプレートを机の上に置き、温度を高めてから油をしいて豚肉を投下する。

「うーん、いいにおい！ お肉って焼いてるときが一番美味しそうなよね」と良い具合に焼けるとテレビを見ていた飢えた虎がこちらに食いつく。

「藤ねえもイリヤに見習って何かしたらどうだ？」

「だめよ。タイガが料理を手伝ったらそれこそ惨事の始まりなんだから。つまみ食いで後にはなにも残らないわ」

呆れて小言を漏らすと、だいぶ小さくなった大根に苦戦しているイリヤはしよりしよりとすりながら答える。

「そうよー、士郎。私は食べる人、士郎は作る人、ね」

——何が「ね」だ。

はあ、と大きくため息をついてから。

「イリヤ、もうそれぐらいで大丈夫だぞ。あんまりやって手を怪我しても大変だからな。あとはそこにポン酢を入れて少し混ぜてくれ」

「そう?……はい!」

するとイリヤは最後に残った大根をギュッと押し潰すようにしてすりおろし、立ち上がってテッテッテと台所へポン酢を取りに行った。

肉に色がついてきたので玉ねぎを入れ、そしてニンジンキャベツと加えて炒めていく。

最後に中華麺と少量の水を加え、炒めながら鶏ガラの素を少し入れて味を引き立たせる。

切られたニンジンと菜箸で取り、食べる。

「うん、完成だ」

文句なしの出来映えだった。

わーいと喜ぶ二人に皿をとってきてもらい、器に盛り付けた。

そしてイリヤにおろしてもらった大根をのせ、ネギをちらして配る。

「じゃ、いただきます」

3 人のいただきまーすと元気に響いた昼過ぎだった。

ちよつと明かされる桜の黒さ

——『子供の頃、僕は正義の味方に憧れていた』

それは、4年前の冬が近づく秋のころ。

爺さんの誕生日を過ぎ、弓のようにもしくは剣のように見える細の月の下で交わされた、寝るには遅い時刻の話。

爺さんと二人、静かに虫のなく声が聞こえる縁側で、眩しく輝く月見をしていた時の話だった。

この頃の爺さんは今までの外出率が嘘のように、家でのおんびりと過ごすようになっていた。

寝ている時間も長くなり、食べる量ももともとあまり多くなかったが、それよりも明らかに減っていた。

それで俺は、……薄々ながら気がついていた。

——『なんだよそれ。憧れていたって、諦めたのかよ』

自分にとって正義の味方そのものであった爺さんのあまりの言葉に、俺は少し

ムツとして言い返した。

後になって思えば、そのこぼれるように落ちた弱い言葉といっこうに寝ようとしてない爺さんの様子に、俺はこれが爺さんの……なのだと、子供ながらに反発したのかもしれない。

しかし爺さんは俺の返しに小さく頷いてから、遠い雪のように白く輝く月空を仰いで寂しそうに、そしてどこか嬉しそうに答える。

——『うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、オトナになると名乗るのが難しくなるんだ。そんなコト、もっと早くに気がつけば良かった』

その言動に俺は、その表情と言葉の対比に困惑した。

爺さんの呟かれた言葉には確かな後悔の情がのっていたはずなのに。

それでもこのときの爺さんの顔はとて、なによりも満足していたのだから。わからない。

正義を目指した男はいったい果てに何を見たのか。

わからない。わからない。わからない。

本当に？

俺は本当にそれをわからないのか？

いや違う。

わからなくとも俺はなぜなら見ていたはずだ。

わからなくとも俺はなぜなら見ていたはずだ。

正義を目指した男が、その果てに選んだモノを。

——『そっか。それじゃしょうがないな』

——『そうだね。本当にしょうがない』

後悔はある。

今まで辿ってきた信念の結果に。

それでも爺さんが、この光景に満足していたのなら。

それならばこの自分の信念正義を捨ててまでつかんだ男にする最期の俺の台詞誓いは——

ジリリリと時計になる。

なんてことはない、朝の知らせだ。

いったいなぜ。

今さらになってあの日の夢を見たのだろうか。

薄く残る夢の欠片を繋ぎ合わせながら、爺さんの最期の会話を思い出す。

あの日、その朝を迎えれば爺さんは静かに幸せそうな顔をして、永い眠りについていた。

故に俺は、あの日の誓いを胸に残して今を生きている。

決して違えないと誓ったあの言葉を胸に――

すると、ジリリリともう一度時計がなる。

いい加減起きる時間だ。

そうして俺はうるさい時計を止めてから、温かな布団をはいで朝の支度にでた。

朝食を作っていると、玄関から「おじやまします」と明るい声が聞こえてくる。

「おはようございます、先輩。もう起きていたんですね」

「ああ。今日は珍しく寝付きもよくって目覚めもバッチリだったよ。もうすぐで起きるから、イリヤを起こしてきてくれないか？」

「はい。じゃあかわいい寝姿を拝見してきますね」

と居間に入ってきたばかりの桜に申し訳ないがイリヤの起こしを頼む。
すると桜もふふつと笑ってからそのまま居間を後にした。

「シロウー、おはよー」

そして少したってから、目を擦りながら戸を引いて入ってくるイリヤ。

「おはよう、イリヤ。ごはんできてるぞ」

「……はーい」

と、朝の若干ハリのない声で返事が返ってくる。

その後ろに桜もついており、イリヤの髪を整えていた。

「藤村先生は今日は来ないんですね」

配膳と一緒にしていると桜が今出来る心配のない藤ねえを心配して呟く。

「今日から冬休みまで藤ねえは来れないそうだぞ。まあ色々大変な時期なんだろう」

「昨日ね、サクラが帰ったあとにそう言ってたわー」

いまだ眠いのか、席に座ってるイリヤはふわーっとあくびをしながら俺の言葉に

補足する。

「……そうですね。私も高校受験が近づいているのでドキドキします」

「勉強は慎二が見てるんだろ？なら全然気にすることはないと思うけどな」

「はい。兄さんからも間桐家から受験に落ちるやつを出すなんて恥だーって見てもらってます」

「ふーん、そのシンジって人、かなりひねくれてるのね」

あははは、まあそうだなと桜と二人笑いながらイリヤに答え、席につく。

「それじゃ、『いただきます』」

三人手を合わせて朝食をいただいた。

行ってきます、行ってらっしゃーいとイリヤと挨拶を済まし、その後桜とも中学との分かれ道で同様に済ました。

「おっ衛宮じゃん。よっ、おはよー」

「うん？なんだ美綴か、おはよう。今日は朝遅いんだな。朝練はどうしたんだ？」
登校中に後ろから声かけられる。

肩も叩かれ、振り向くとそこには風の噂で弓道部の次期部長と目されている美綴綾子がいた。

「いやもうテスト前じゃん。部活動は全面禁止。はーあ、試合も近いのにさー」

「ああ。そういえばそうだったな」

ため息を吐く美綴。

思えば来週は期末テストだ。

大抵の学校でそうなように、この穂群原学園も例にもれずテスト前は部活動の活動が停止される。

それはたとえ試合前だろうと関係なしだ。

「それより衛宮はさ。肩の怪我、もう治った？」

「あー、……。もとから痛くはなかったんだけどな、もう治ってるよ。でもたぶんこのまま傷は残ると思う」

「そっか。……まあいつでも戻ってきていいからね。気になるようだったら藤村先生と相談して、包帯でも巻いても良いってしてもらおうしさ」

ああ、とその場は曖昧に返事をして沈黙が流れる。

「……」

「……」

同じ場所を目指しているの、お互いなのにも話さないまま気まずい空気が続く。

「——おい衛宮」

するとまたも後ろから声がかけられた。

この空気を何とかしたかったので俺はすぐに振り向く。

「お、慎二か、おはよう。なにかようか？」

「いや、今はいい。今日の昼、少し付き合え」

さして珍しくもないが、朝から少し不機嫌な様子の慎二はそのまま俺たちを通りすぎて学校へと向かって行った。

その後ろ姿には今は何も話しかけるなどと言っているような気がした。

「なに？衛宮また間桐と喧嘩したの？」

「特にそんなことはなかったと思うが。それより、俺と慎二は喧嘩をまたもなんてしょっちゅうみたいにしてないぞ」

「ふーん、あつそ。まあ間桐は先週から元気がなかったような、覇気がなかったよ

うな感じたったからね。いい加減動き出したってところかな」

そうして慎二についての話題ができ、その後は学校がつくまでいったい何があったのかなどと話し合っていた。

学校につくと下駄箱で別れ、そのまま一人で教室に向かって行った。

そして昼。

「衛宮、今日は——」

「衛宮、屋上に来い」

「お、おう」としかその一瞬では答えることができず、そのまま慎二は教室を出る。先に話しかけてきた一成も俺もしばらく固まっていた。

「……なんだあの態度は。衛宮、気にすることはないぞ。それより早く昼にしないか」

「悪いな一成。今日は朝に慎二から誘われてたんだ」

「む、そうだったか。……それならば仕方ないか」

では、失礼すると断って一成もそのまま教室を出ていった。

さて、慎二のやつはいつたい朝から何に不機嫌なのだろうか。

階段を上り、屋上へつく。

屋上の重いドアを開けると、そこには今日の曇った天気と自身の弁当を広げた慎二がいた。

「よう、今日は朝からどうしたんだ？」

声をかけてとりあえず反応をうかがう。

「……衛宮。お前アイツに何をしたんだ」

「アイツ？ えーと、もしかして桜か？」

「ああそうだよ。僕の今日の弁当、どう思うよ」

先程からの慎二の要領の得ない会話に戸惑いながらも、俺は慎二の弁当を見る。
「どうって、ご飯にハンバーグに大学芋だな。それがどうかしたのか？」

「ああそうだな。今回はちゃんと他の具材も入ってたからまだ良かったよ」

慎二の弁当は二段の一般的なやつにハンバーグを半分にして詰めたものと、おそらく俺が昨日桜に渡した大学芋が入っていた。

一応他にもミニトマトやリンゴも入っているし、かなり豪華な弁当だと思う。

「なあ衛宮。僕が今日の朝何を食べたか知ってるか？」

「いや、知らないけど」

「……ハンバーグだよ」

その言葉は心底うんざりするようなトーンだった。

「朝からハンバーグか？結構食べるんだな」

「なあ、昨日の昼と夜は何を食べたと思う」

「いったいこれはなんの質問なのだろうか。」

俺の答えが聞きたいわけではないということだけは何となくわかってきた。

「えーと、もしかしてハンバーグか？」

「ああそうだよ。アイツ！お前のところから帰ってきてからハンバーグばっか作
るんだ！」

「いやでも、他にもちゃんと入ってるじゃないか。それに桜が慎二のために作って
るんだろ？文句を言える立場じゃないだろ」

「はあ？アイツが僕のためにだって？……まあいいさ。じゃあ衛宮、僕が先週一

週間何を食べていたと思う？」

そろそろ話をただ続けるのも疲れてきたので、俺も慎二の横に座って弁当を広げながら答える。

「いや、知らないけどさ」

「知ってるだろ！お好み焼きだよ！お好み焼き！ほんと一週間、毎食お好み焼きさっ！」

くすぶり続けていた慎二はついに爆発し、どんどんと口から文句が出てくる。

「何を思い立ったか知らないけどさ、先週の日曜の夜にいきなりお好み焼きを出してきたんだ。それはもうひどくてさ。粉が固まってるような食感が残ってて、もう食えたものじゃなかったね。ほんとなんだこれはって文句を言ってやったよ。……まあ食ったけどさ。そしたら月曜の朝、起きたらお好み焼きさ。そして弁当も当然のようにお好み焼き。帰って夜もお好み焼き！あああ！お好み焼きお好み焼きお好み焼き。一週間、ずっとお好み焼きさ！」

うわあ……と若干引きながらも慎二の話を弁当を食べながら聞く。

「……毎回文句をさんざん言ってやったのに、桜は全くやめようとしなかった。木

曜金曜はもう味なんてわからなかったよ……」

それでも食べたんだな、と声には出さないが慎二の話を黙って聞いていた。

「それで、お前ん家に泊まって帰ってきたら、今度はハンバーグになってるんだぞ！これはもうお前のせいとしか考えられないだろ！」

なるほど、ようやく慎二の言いたいことがわかった。

「慎二、ありがとう。お好み焼き、とてもうまかったぞ」

「お前ふざけんなよっ！」

はっはっはっと笑って続ける。

「そうだな。でも桜だったらたぶん食べたいやつを頼めばそれを作ってくれると思うぞ」

「はっ！何で僕がそんなことをアイツにしなくちゃならないのさ。そもそも料理なんて使用人に任せるものだろう」

「あっそ。まあとりあえず弁当食べようぜ。昼も短いんだ」

そう言う慎二はふんっ、と鼻をならしてハンバーグを食べ始めた。

「……焼きすぎだろこれ、なんか固いし。……うむ。……はあ、この大学芋はちょっと甘過ぎるな。……リングが一番うまいよ……。……はあ、これからハンバーグが続くのか……」

ちよくちよく漏れる舌のこえた慎二の感想に心のなかで笑いながら、やっぱり甘かったかと反省した昼過ぎだった。

ちよつと忙しい聖なる前日

期末試験も終わって冬休みに入り、いつの間にか『もういくつ寝ると』と歌えられるほどの日数となった。

その約一週間前にあたる今日と明日は聖なる日となっており、それを祝うかのようには街も賑わいを見せている。

そんないわゆるイブに当たる今日24日に俺は、特にイリヤや桜と一緒に何かしているわけでもなく、臨時のバイトに勤しんでいた。

「いやー、悪いねエミヤン。他のバイター君がドタキャンに次ぐドタキャンでさー。急なヘルプを頼んじゃって」

「いえ。俺もこの店には大変お世話になったので、困ったことがあったなら必ずとは言えませんが手伝いますよ。でも今回はちよつとタイミングが悪かったんですけどね……」

注文を運び終わり戻って来たネコさんが、トーストを焼く傍らでサラダを盛り付ける俺に対して謝罪する。

時期柄か、この時間帯では珍しい混雑ぶりを見せるコペンハーゲンの昼の顔である喫茶店風のここキッチンで、ひっきりなしのモーニング注文をこなしていた。

こんなことになってしまったのは昨晚のこと。

その日、桜は何か準備があるからと家に来なかったので、夕食をイリヤと藤ねえの3人で取っていた時。

俺はいち早く夕食を食べ終わり、藤ねえのご飯のおかわりを注いでいたところで無機質なベルになる。

かかってきた電話に小走りで向かい、受話器をとると先のネコさんの語った理由によってヘルプを頼まれたのだった。

俺はこの時に明日が24日だと言うことをすっかり頭から抜け落ちており、そのままの流れで了承してしまった。

そしてバイトが入ったとイリヤに伝えるとイリヤはほほを膨らませ、「ふんっ！ シロウなんてもう知らない。明日はサクラと遊ぶんだから」と後から思えば当たり前。前の理由で拗ねてしまった。

しかしその時の俺にはなぜイリヤが拗ねたのか見当がつかず、藤ねえに顔を向けると藤ねえも大げさにため息をつき飽きられてしまった。

そして藤ねえが補足するに、どうやら桜と遊ぶというのはクリスマスにイリヤと桜が前もってお泊まりを企画していたらしく、そして藤ねえも参加してのパーティーをすることになっていたのである。

俺は藤ねえの言葉でようやく明日がクリスマスだったと思いだったが、今さらバイトを断ることもできなかった。

そして未だ頬を膨らませてそっぽを向くイリヤと、わざとらしく両手を肩まで上げて首を横に降る藤ねえに謝ったのであった。

そのため帰ったらイリヤの機嫌を取るために、新都に出掛けてイリヤの好きなぬいぐるみでもプレゼントしようと密かに算段をたてている。

——チンッ

とうしょく
橙色に照らされていたオーブンの中が、その高い音とともに暗くなる。

「モーニング A セットあがりです」

「りょかい！前に出しといてー」

出来上がったセットを配膳台に置き、次の注文レシートを見ながらさばく。

「エミヤーン！追加の注文で——」

今日はなかなか休めそうになかった。

時刻は日も傾き始めての 4 時近く。

昼時の賑わいを通りすぎて、店には一人か二人がゆつくりとコーヒーを煽りながら本やら新聞やらを読んでいた。

「うーん！おつかれ、おつかれー。店長に特別手当をお願いしとくよ」

「いえ、……。そうですね、ありがたくもらいます」

「おっ!? なになに？ なにか欲しいものでもあるの？」

いつものごとくボーナス的なものを断ろうと思ったが、この後のことを考えてそのまま頂くことにした。

その態度が珍しかったのか、ネコさんは目をキラリと光らせてから、身を乗り出

して聞いてくる。

「今姉さんが遊びに来てるんですよ。それでクリスマスプレゼントをと思いまして」

「あー、イリヤちゃん、だっけ？ そっかー今年も来てたんだ」

ネコさんは少し上を向き、顎先に手を当ててからぼんっと閃いたかのようにイリヤの名前を出して頷く。

「へー、プレゼントかー。もう何を買うか決めてるの？」

「そうですね。まあぼちぼちと当たりはつけてますけど」

「なにになに？」

「まあ、姉さんが気に入るようなものを見繕いますよ」

「何、内緒？ ふーん、まあいいけど。それでいくらぐらいなの？ ホントは今日もイリヤちゃんと過ごす予定だったんでしょ？ 悪いことしたねー」

「よく考えなかった俺が悪いんですからあんまし気にしないで大丈夫ですよ。お金もあまり気にしないでください」

そう答えるとネコさんは「うーん、りょーかい。もう上がって大丈夫だよ、今日はあるがとね」とあまり納得していない顔で店に戻っていった。

更衣室で私服に着替えてからネコさんが来るまで財布の中身を確認していると、にししと笑い顔で封筒をピラピラと揺らして歩いてくるネコさんが視界に映る。

「はいこれ、今日の特別手当ね。中身は外に出てから確認しといて」

有無を言わず広げていた財布にねじ込まれた封筒に俺は目をうろつかせていると、「はい、出た出た。イリヤちゃんにいいものを買ってあげなよ」と背中を押されて店先まで追い出される。

「ちょ、ちょっと——」

「——あー、そういえば柳洞寺で幽霊騒ぎが出てるって聞いてる？」

封筒のお金について触れられたくないのか、背中を押されながら話題を強制的に変えられた。

「え？幽霊騒ぎですか？てっ、そんな押さないでください！」

「そそ。なんでもお供え物がなくなったり、お酒がなくなったりって。どうもお金は取られてないみたいなんだけど」

「へー。……あつ、そういえばこの前の配達の時になんか会いました。袈

袈？ っていうのか何か羽織を纏った長身の男が1瓶抜き取ってすぐに消えたんですよ」

そういえばそのことをイリヤに尋ねてみようとしていたんだった。

すっかり忘れていたが帰ったら聞くことにしようと考えていたら、いつの間にか店先の勝手口まで追い出されていた。

「それじゃ、イリヤちゃんに謝罪の気持ちも伝えとい、って！」

と最後のひと押しのうちにネコさんにトンッと押し出される。

小さくない衝撃に、前のめりになる体を立て直しながらネコさんへと振り返ると、手をひらひらと振りながらドアを閉められた。

コペンハーゲンも新都にあるが、その新都のさらに中心街にあるファンシーショップに着いた。

そこはぬいぐるみ専門店となかなか尖った専門性が売りで、内装は野生の王国、バービー帝国、軍事産業ファンシーIVの三つの分野に分かれている。

爺さんとまだ過ごしていた頃には、遊びに来たイリヤと俺とをよくここに連れて

来ては何かを買ってもらえた。

当時の俺は思春期の中学生ぐらいで、ぬいぐるみをプレゼントされるのにどこか気恥ずかしさがあった。

しかしイリヤはここに来ると駆け出すように俺の手を引いてぬいぐるみを見て回るので、行くのが嫌とは言えなかったのだ。

さて、イリヤに何をプレゼントするか。

ライオンかサメか、パンダかイルカか。

それとも定番のクマか。

野生の王国で目につくぬいぐるみを手にとり、肌触りを確かめながら思案する。動物系は毛がモフモフで、海の生き物は滑らかな肌触りだ。

どちらも気持ちいいが……。

「シロウ……?」

男子高校生がぬいぐるみを真剣な顔で持ち、肌触りを確かめている状態で後ろから知り合いから声をかけられる。

ここで隣にイリヤか桜でもいたら状況が変わっていたかもしれないが、今は残念

ながら俺一人だ。

覚悟を決めていざと後ろに振り向くと、そこには全身真っ白という印象を受ける二人の修道女がいた。

「え……えっとだな。リズ、これは——」

「大方、お嬢様とぬいぐるみを買いに来ていただけなのでしょう。行動は不審者極まりないですが」

目を泳がして呼びかけてきたリズになんとか答えようとどもっている、セラさんから救いの手が差し伸べられた。

後半は聞かなかったことにする。

「そうなんだ。……じゃあイリヤは？」

セラさんの言葉に頷いたリズはあたりを見渡す。

「いや、俺一人だよ。今日は——」

大事なクリスマスの日をほっぽり出したことを話したら怒られるだろうなと感じながら、正直に説明することにした。

——という訳なんだ。だから今はご機嫌取りも兼ねてぬいぐるみをプレゼントしようかと」

話を終え、すぐさまセラさんからの説教が来ると思っていたが、二人の様子をうかがうと明らかに落胆していた。

「……衛宮様、あのですね。今回のお嬢様のお泊りは——」

「セラ」

思ってもいなかった彼女たちの反応と、何かを言いかけたセラさんとそれを止めたリズに俺は違和感を覚える。

「そうですね、リズ。すみません、言い過ぎるところでした」

「うん。……それでね、シロウ。今回はできるだけイリヤと一緒にいてほしいの。シロウの予定があるなら仕方がないけど、それ以外はイリヤと一緒にいて。お願い」
「あ、ああ。わかったよ。俺もイリヤとは冬しか会えないんだからな。そのつもりだ」

「……ありがと。イリヤをよろしくね」

言つては悪いが感情があまり顔に出ないリズが、珍しく複雑そうな表情で謝辞を言う。

その隣でセラさんも小さくため息をついた。

「それでは私たちはこれで失礼しますね。……それとお嬢様は最近シロクマが大好きですよ」

「よくシローって呼んで可愛がつてる。じゃあね、シロウ」

そして彼女たちはそれ以上何も続けず、裾をつまんで優雅にお辞儀をしてから離れていった。

二人と別れたあと、シロクマのぬいぐるみを手に持ってからふと考える。

もしかしてアインツベルンの方で何かあったのだろうか。

思えば今回の泊まりははじめから不自然なところがあった。

いつもならイリヤが遊びに来た日は家の前に黒塗りの長い車が無理やり止まり、いの一番にイリヤが飛び出してきていた。

それが今回では、イリヤは商店街を一人で歩いており、そのまま連れ帰ってし

まった。

その後、セラさんとリズが家に挨拶に来たが、イリヤと会う前に帰っていったのだ。

もしかして、……。

喧嘩だろうか。

時間も気になってきたところなので、イリヤにはそこそこ大きなシロクマをプレゼントにし、桜の分も選び始める。

桜ははたして何のぬいぐるみをプレゼントにしたら喜ぶだろうか。

ネコさんからは封筒を確認するとなんと2万円もの大金が入っており、これ为本格的なぬいぐるみを2つほど買うことができる。

藤ねえには適当にトラを買うとして、そうだな、桜には可愛らしいテディベアにしよう。

イリヤも桜と仲がいいみたいだし、同じクマなら仲良く喜ぶだろう。

そう思い、俺はレジへと向かっていった。

ちょっと人の集まる聖なる前夜

まいった。

重い、辛い、しんどい。

後悔先に立たず、というよりは考えなしかったのが悪かったのだが。

大きめのぬいぐるみ2つに小さいぬいぐるみ1つを、それぞれに梱包された箱を積んで抱えて帰路につく。

積み重ねるとそれは1m近くになり、さらにプレゼント用に装飾されているので箱が綺麗な直方体になっておらず、歩きたびにグラグラと揺れてしまう。

前が積まれた箱によってほぼ遮られているのでふと空を見上げる。

空には黄昏色から藍色になる綺麗なグラデーションがかかり、思わず写真に納めたくなる光景だった。

日は新都のビルに隠れてもう見えないが、水平線に落ちている頃だろう。徒歩で家に着くのにどれほどかかるか。

——おっとと。

少しのつまづきで危うく積まれた箱が崩れるところだった。

「はぁ……」

カートさえあれば楽なのだがと、視線を上から横に向けて車道に走る自動車を眺める。

後ろから過ぎ去っていく車には後部座席で上機嫌な子どもが映った。

それもまた、……またと、楽しそうな小さな子を見ると改めて今日がなんの日なのかを知らされる。

藤ねえが昨日の夕食後にこっそりと教えてくれたことだが、イリヤは今日の昼、本当は皆で七面鳥やケーキを作ろうと計画していたらしい。

桜のことなのでおそらく慎二はしばらくの間、七面鳥とケーキ漬けだったのだろう。

思わずここにいない友人に対して合掌してしまいそうなところで、後から来た白く綺麗な車がスピードを緩めて近くに止まった。

トラブルだろうかと気にせず横を通りすぎようとしたとき、後部座席の窓が下りる。

「よお、衛宮。随分な荷物を持ってんじゃないか」

「なんだ慎二じゃないか。どうしたんだこんなところで」

噂をすればなんとやらというのだろうか。

声をかけてきたのはまさかの慎二だった。

「ふん、なんだとはご愛想だな。せつかくこの僕が寛大な心をもって、バカみたい
に荷物を抱えるお前を、とても快適な車に乗せてやろうと思っていたのに」

「えっ、いいのか？」

「……まあ優等生な僕は、通りがけに見かけたヘトヘトの友人を素通りなんてしな
いからな。僕の帰り道と出会ったことに感謝して乗るんだな」

「いやー、助かるよ。ありがとな、慎二」

心からの感謝を述べたというのに慎二は何が気に食わなかったのか、フンツと鼻
を鳴らす。

「荷物はトランクに入れとけ。席が狭くなるからな」

そう慎二は忠告してから窓を上げた。

「ほんと助かったよ。ありがとな」

乗って実感する車の偉大さに、隣りに座る友人へ感謝する。

ああ、と素っ気なく慎二は返答するが、態度がそわそわとしているのでどうやら何かを聞いて欲しいようだ。

乗車と感謝ついでにそれに乗ってやるかと少し車内を見渡し聞いてほしそうなことを考える。

「そういえば運転手の彼は使用人なのか？」

「ああ、そうだ！いいか衛宮、僕はね、思いついたのさ。あの大きな家で一人で静かに過ごすことには全然これっぽっちも構わなかったんだけどな。桜のあの残念な食卓を今後も続くと想像すると大事なこの僕の身が持たなくなる。だからこの間桐家の長男であり当主でもある僕は、盛大に5人もの使用人を雇ったというわけさ！」

「なるほど、いやなるほどとは言っちゃいけないか。それにしても一気に五人雇うなんて思い切った真似をするな」

「コック一人に掃除人が二人、運転手がこいつであと一人は元コックの家事手伝い

さ」

「まあ、間桐家って明かりがあまりついてないから少し寂しい雰囲気だしな。人が多く住むってのはいいんじゃないか？」

「余計なお世話だよ」

「すまん。それでこの車はどうしたんだ？」

「車庫ではこりかぶっていたから洗車させた。どうだ？ 少し年代モノだが衛宮じゃ一生乗ることはできないクラスだぞ」

そうだなと、その後も上機嫌で続く慎二の話に適当に相槌を打ちながら外の景色を見る。

それは丁度、真っ赤に燃えるように夕日に照らされた冬木大橋だった。

新都からもう出たのか。

本当に車は速い。

当たり前のことに改めて実感する。

「それで慎二はどうして新都にいたんだ？」

話も途切れたことなので新たな話題をふる。

「……デートの帰りさ」

「夕方までの？」

「そうだよ。なんだ文句でもあるのか？」

慎二は顔をそらして言いにくそうに続ける。

彼女は一人で帰ったのか、とでも聞いてみたかったが今回は深く突っ込まないことにした。

「それで話は変わるが、慎二は今日の夜何か予定が入っているのか？」

「……………」

「ん？」

「……ないよ。何も予定なんて入っていないよ！」

慎二はヤケになったかのように詰め寄ってきて叫びかかる。

「なんだよ、そんないきなり怒鳴るな」

「話が変わってないだろう！」

「そうか？でもそれなら俺の家にこのまま遊びにこないか？」

「うっ……」

「どうしたんだ？」

「……………」

「もしかしてなんだが。桜に一度俺の家にクリスマスに来ないかと誘われたけど、デートがあるからと断った手前、桜と会うのが恥ずかしいとかか？」

「何だよ、その説明口調は！ああそうだよ！そのとおりさ!!」

やけに今日の慎二は不安定に荒れている。

おそらく偏った食生活が影響しているのだろう。

「そんな意地はるなって。桜もそんなこと気にしないぞ」

「…………いや、それもあるんだがな。今日はせっかく家に桜がいないんだ。あいつ、せっかく使用人を雇ったっていうのに昼と夜は続けるんだよ」

「……確か冷凍庫にサンマが残っていたはずだ」

「……ならご飯と味噌汁もつけろよ」

「……わかった。こっそり用意しとく」

という訳で大変苦労な友人を急遽労ることが決定した。

昼夜に七面鳥とケーキ漬けの日々なら塩つけの和食が食いたくなるよな。

本当にお前はいい兄をしているよ。

それを朝早くから用意する妹にも感服する。

「でっか」

日も落ちてしまったが、予定よりも早く家に着いたところで、塀の前に黒塗りの長い車が止まっていた。

その光景に慎二は口をあんぐりと開け、率直な感想を思わず漏らす。

「あの車はでかくて門を通らないんだよ。運転手さん、ちょっと門を開いてくるので待っていてください」

運転手さんに頭を下げて礼をいいながら車から降りる。

どうやらこの路駐している黒塗りの車を見るに、セラさんとリズも来ているようだ。

ふむ、だから彼女たちもぬいぐるみを買って来ていたのかと、一人納得しながら玄関門を大きく開けて戻る。

「それじゃあ誘導するので庭に止めてください」

そう外から運転席に向かって話しかけて手を振る。

どうやら無事慎二の車は門を通れたようだ。

路駐が増えなくてよかったとホッとする。

その際慎二は通り抜く長い車を呆然と眺めていた。

「先輩、おじゃましています」

車の音に気がついたのか、桜は玄関から迎えに来てくれる。

渡り廊下を見れば藤ねえも手を振っていた。

イリヤの姿が見えないところを鑑みるに、未だご機嫌斜めのようだ。

「車を見たらわかるかもしれないけど、今日のパーティに途中で会った慎二も誘ったんだ。よかったか？」

「はい。でも兄さん、今日は予定があるって……？」

不思議そうな顔をしながら桜は車の方にも小走りで向かって行く。

「ふん、来るつもりなんてなかったけどさ。衛宮がどうしてもって言うから来て

やっただけだよ」

トランクからプレゼントを取り出していると、近くで慎二と桜の会話が聞けえてくる。

「……ありがとうございます。その、イリヤさんと一緒に七面鳥を焼いたので、ぜひ召し上がってください。食後にケーキも用意しているんです。きっと今まで一番美味しく出来上がったと思います」

「……あ、ああ。わかったよ」

あ、口元が引きつってる。

俺は何も見なかったことにして、家に入った。

「あっ、シロウ。さっきぶり」

自室に向かう廊下でリズとすれ違う。

彼女の手には人生ゲームの箱が抱えられていた。

「それ、出してきたのか？」

「そう。みんなでやろうと思って。シロウもやるよね？」

「そうだな。このプレゼントを自分の部屋においてきたら参加させてもらうよ」
その場の会話が終われば、彼女は気持ち弾んで居間に向かっていった。

プレゼントを置き、居間に入るとそこはかなりの大所帯となっていた。

「あなたが桜の兄の慎二ね。話しに聞いたとおりみたいね」

「そういうお前は桜が言っていたイリヤってやつか？何だ、思っていたよりも小さなやつだな」

「この間桐のドラ担当が、お嬢様になんて口の聞き方をっ！」

「サクラはピンク、タイガは黄色ね。私は、……黒でいいや」

「リズさんは何となく白のイメージですけど黒でいいんですか？」

「白はイリヤちゃんなんじゃない？あとはそうねー、セラさんは水色の車で慎二くんは青。士郎は赤ね」

四辺合わせて8人がけのテーブルで入口近くに慎二が座り、近くに桜とその隣に藤ねえが、そして向かいにセラさんとリズ、そしてイリヤが座っていた。

会話はなかなかのカオスを極めていた。

俺は開いている藤ねえの隣でイリヤの対面に腰を下ろす。

「あつ！ 士郎、遅かったじゃない！ 友人の慎二くんを誘ったのはいいことだけど、もう少し早く帰ってくることはできなかったの？」

「本当に申し訳ない。イリヤも、それに桜も今回は本当にゴメンな。明日ちゃんと埋め合わせをするから。何でも言ってくれ」

「……………」

「えっ、…………な、何でもですか。その、ええ、と…………」

藤ねえからの苦言に謝罪し、今回のお泊りを楽しみにしていたイリヤと桜にも頭を下げて謝る。

桜は顔を赤らめて俯くが、イリヤはそっぽを向いたままだ。

「イ、イリヤ。そのだな…………」

「イリヤ、拗ねてても良いことなんてないよ。今を楽しまなきゃ」

言いあぐねていると、イリヤの隣りに座るリズが小さく囁く。

「そうね。…………シロウ、何でもって一体どんなことをしてくれるのかしら？」

「イっ、イリヤさんっ!? それはど、うぐむむ…………」

イリヤの言葉に桜が追求しようとしたところに、藤ねえが桜を抑える。

その隣りに座る慎二は呆れ顔でこの様子を眺めていた。

「どんなことって言われると難しいけどな。俺にできることならやろうと思う」

「どんなことでも？」

「ああ、そうだな。それで機嫌が治ってくれるなら安いものだろう」

「そう、じゃあ何してもらおうか考えておくね。お兄ちゃん」

「うんうん！それじゃあ仲直りも済んだことだしっ！今日のイベント第一!!『一

番乗りは今夜の主役』！人生ゲームを開催しまーす!!」

「「いえーい！」」

今回限りは常時フルスロットルの藤ねえのテンションに乗り、少し重くなった場を切り替える。

それは皆も同じ考えだったようで、イリヤとリズ、そして桜も少し恥ずかしがりながら参加してくれた。

いろいろあったが結果として過去最大人数のパーティになったことなので、今夜

は思いつき盛り上がりうと思う。

とても幸せな回想

ジャプニカ日記帳

あいんつべるん発行

12月24日 晴れ ☆☆☆☆☆

今日の出来事。

先輩は朝早くにバイトにでかけました。

昼過ぎには帰ってくると言ったのに、夕方まで帰ってきませんでした。

）
）
）
）
）
）
）
）
）

「先輩、遅いですね」

「ほんとねー。士郎ったらどこで道草食ってるのかしら」

「……ナイショ」

「特に秘密にしろというわけではないでしょう」

「シロウは来るわ」

「家主が不在ってどういうことよ」

時刻は4時近く。

昼過ぎには帰れると言った士郎のあまりの帰りの遅さに、桜たちは不満をこぼしていた。

冬真っ盛りになり、日の沈みがとても早くなってきた今日このごろ。

夕日はもう地平線まで降りてきて、家の影に隠れてしまっている。

せっかく料理もたくさん作ったのにと、桜は台所や冷蔵庫にしまった品を見つめ

ながら、いまだ帰ってこない先輩に思いを馳せていた。

——そういえば先輩のことを初めて知ったときもこんな日だったような。

その日は季節は真逆と云っていい初夏のある日のこと。

いつも何かしらと悪態をつく慎二の機嫌が本格的に悪かった日のことだ。

夕方頃に帰ってきた慎二は乱暴に家のドアを開けたかと思えば、いつも帰りをリビングで待っている桜を無視して自室へと向かっていく。

ダンッダンッと階段を強く踏みながら登る足音を聞いて、桜は何かあったのだろうかと足音の鳴る方向を見上げていた。

そして慎二はボタンッときわ大きなドアを閉める音を立て、自室へと引きこもったのだった。

夕食はどうしようかと、桜はテーブルへとすでに用意した二人分のご飯やみそ汁、それと白身のムニエルを見る。

この時の桜は半年近くたった今の桜と比べても、さらに口数が少ない。

ましてや機嫌が悪そうに物にあたるときの慎二に対しては、何か言えるような性格では当然なかった。

そしてひとりで食べることもせず、待ったら降りてきてくれないかなと何分間か、天井越しにある慎二の部屋を見上げながら桜は冷えてきたお茶を飲む。

バタンバタンガッシャンと慎二の部屋から音が聞こえてくる。

一体何を投げつけているのか、何に氣を立てているのだろうか、桜はイスに座りながら考えていた。

鳴り響いていた慎二の部屋が静かになってからしばらくたち、彼が一向に降りてこない様子だったので桜は静かにイスを引いた。

なるべく音をたてず、抜き足差し足と階段や廊下を渡りながら、桜は慎二の部屋の前までたどり着く。

そして扉の前でノックをするか軽く手を握った状態で逡巡し、コクと小さく頷いてからコンコンコンと扉を叩いた。

「に、兄さん。どうしたのですか？」

ノックをしても返事のないこの屋敷の主は桜にしては大きな声で安否の確認を取

る。

「……ええっと、入ります。……兄さん、失礼します」

それでも一向に返事のないこの部屋の主に桜は断りを入れてから扉を開けた。

「うっ……」

久しぶりに入った慎二の部屋のあまりの汚さに桜は小さく呻く。

文房具は床に飛び散り、枕はベッドとは反対の壁際に落ち、教科書などの本が乱暴に開かれていた。

「………」

とりあえず怪我をしないようにと、桜は床に散らばった文房具や本を適当に拾いながら勉強机の上にのせ、ベッドに眠る慎二の顔のそばに枕を置いた。

そして静かに部屋から出た。

「……いただきます」

その日はほんとうに久しぶりに、夕食をひとりで食べた。

次の日、桜は聞いてもいないのに慎二から昨日の愚痴を聞かされた。

桜は兄さんと喧嘩中の友だちは仲がいいんだなあと思った。

また次の日、桜は聞いてもいないのに慎二から喧嘩中の友だちの今までと変わらない態度を聞かされた。

桜は兄さんと喧嘩中の友だち、衛宮というらしい、衛宮先輩は仲がいいんだなあと思った。

またまた次の日、桜は聞いてもいないのに慎二から士郎が部活をやめたことを聞かされた。

桜は兄さんと衛宮先輩は仲がいいんだなあと思った。

またまた、またまたまた――

桜は慎二から士郎の家の住所を聞いた。

慎二は士郎の家に絶対に行こうとはしなかったので、桜は学校から帰ってすぐ教えてもらった住所へ向かい、途中何度か道を間違えながらも士郎の家にたどり着いた。

——大きな屋敷。

それが桜のその家を見た時の、最初に感じた感想だった。

桜は迷わずインターホンを鳴らす。

こここのところの慎二の聞いてもいないのに話してくる影響で、桜にしては大胆な行動を取らせる。

ガチャッとドアの鍵が開けられた音がして、ビクッと桜の肩が震えた。

桜は今更になって自身の大胆な行動に気が付き、怖気づき始める。

「はい？どちら様ですか？」

警戒心もなく、訪ねてきた相手を確認もせずにドアを開いて桜は出迎えられる。

「……………」

士郎に真っ直ぐと目を見られて、桜は咄嗟にとっさに俯いてしまう。

「え、ええっと。こんな日の落ちた時間にどうしたの？迷子かな？」

士郎の無意識の気遣いからか、近づきすぎず離れすぎずの絶妙な距離から桜は話しかけられる。

その氣遣いが慎二の話していた印象から微妙に異なっていたので桜は小さく笑ってしまふ。

——優しい人なのかも。

勇氣が湧いてきたのでもう一度目を見て話そうと桜は顔を上げるも、士郎と目が合うとすぐに下げてしまった。

「その……、突然訪問してすみません。……私、間桐慎二の妹です」
「えっ？ 慎二の？ でも……」

桜は俯いたままなので士郎の顔を見ることはできないが、とても觀察されている気がした。

そして士郎が言い淀んだ理由を桜はなんとなく理解できた。

桜は慎二とは容姿が似ているとはとても言いづらい。

何か訳ありなのかと勘ぐってしまったのだろう、と桜は士郎の考えを見抜いていた。

「……ああ、ごめん。えっと、それで慎二の妹さんがどうしたの？」

『しろー、何やってんのー。セールスなら早く断りなさいよー』

「藤ねえ！セールスじゃないから少し静かにしててくれ！」

「ひっ……」

「ああ、急に大きな声を出してごめんね」

「……い、いえ。大丈夫……です」

あまりのいたたまれなさに、桜はこの場から帰りたくなってくる。

——そもそもどうしてここに来たんだっけ。

完全に勢い任せの行動をしてしまった桜は、少しづつ後ずさりをしてしまう。

そんな会話の途切れたときに、土郎の後ろから大河がやってきた。

「もう、何よ士郎。……あら？可愛い子？深緑の綺麗な色ね」

「お、おい藤ねえ！」

大河が桜の髪の色を褒めると士郎はすぐに止めようとした。

髪の色を褒められて少し複雑な気分になるが、桜はとりあえず礼を言うことにする。

「ありがとうございます。……夜分遅くに申し訳ありません。私は間桐慎二の妹の桜です」

「あ、ああ。もしかして慎二から聞いてるかもしれないけど、俺は衛宮士郎——」
「ちょちょちょ！待って待って!! えっ？間桐くんの妹ちゃん!? んっん！ごほん。こんにちは、桜ちゃん。私は藤村大河です。ここにいる衛宮くんやあなたのお兄さんの間桐くんが通っている学校の英語の教師をしていて、間桐くんが参加している部活の顧問もしているのよ」

「藤ねえ、もう遅いって。それに口調も変だぞ」

「に、兄さんのって、もしかして弓道部ですか？」

「あら、間桐くんから学校の話聞いてるのね。ふーん、少し意外ねー」

大人の女性が現れて、少し緊張が溶けてきた桜はようやくまともに会話ができるようになる。

顔を上げると大河が士郎の横腹を小突いているのが見えた。

「それにしてもこんな時間に中学生が一人で出歩くなんて、……とりあえず士郎、桜ちゃんを家にあげましょう。でも手を出しちゃ絶対ダメだからね」

「あっ、あたりまえだろ！変なことを言うなよ！」

「うん、それじゃあ桜ちゃん。夏になってきたからと言って夜はまだ冷えるから一

旦那にあがない？士郎にはきつく言うから安心して」

「……はい、ありがとうございます」

ふたりの気のおけない会話を聞いて、桜は当初の目的を忘れて初めて士郎の家にあがる。

士郎は腕を怪我していたので、桜がそこはかとなく手助けしながら日が落ちるまで三人で会話を楽しんだ。

その夜、士郎に送ってもらいながら帰宅した桜は聞いてもいないのに――
桜は当初の目的を思い出したのだった。

それから段々と通う日数が増えたきたこの頃。

――先輩はやっぱり部活に戻ろうとしない。

養父の命日らしい今日も、桜は当初の目的を半分忘れかけながら士郎の家に通っていた。

話によると冬には士郎の義姉であるイリヤが来ると聞いた桜は、やはり当初の目的を忘れた彼女は先輩の家族からの第一印象を良くするために新たな行動を開始し

た。

なんでもイリヤはハンバーグが好きらしい。

今日は早めに帰り、桜はひき肉を買うことにした。

そして士郎と商店街で買い物をしている冬の時期。

「はじめまして、サクラ。わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。シロウが世話になってるようね」

桜は自身の姉と並んで歩く、銀色の髪をした妖精のように小さく可愛らしい少女に会った。

前回の続きを期待していた方、すみません。

クリスマスイベントの後半は桜sideの回想編です。

これまでの出来事との食い違いはきつと桜の記憶違いではないでしょうか。

ちょっと平和なF a t e/s t a y n i g h t

著者 ライム酒

発行日 2019 年 11 月 5 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/180466/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。